指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地隣接地における個人住宅建設に伴う確認調査報告書

Hashimuregawa-Archaeological-Site

橋牟礼川遺跡

1991年3月

鹿児島県指宿市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，平成元年１月８日から同年同月28日まで実施した，鹿児島県指宿市十二町3290～８に所在する橋牟礼川遺跡（国指定史跡隣接地）の新城勝朗氏宅建設に伴う確認調査報告書である。

2．発掘調査は指宿市教育委員会が主体者となり，下山　覚が担当した。

3．調査中の遺構の実測は，下山覚，渡部徹也が主として作成し，前幸男の協力を得た。遺構の製図は下山覚，渡部徹也が行った。

4．遺物の実測，製図は下山覚が行った。

5．写真撮影は，現場関係を渡部徹也が，遺物関係は下山覚が行った。

6．本書の執筆は，下山覚，渡部徹也が分担し，執筆者名は文末に記した。

7．本書第２章橋牟礼川遺跡の地質については，鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校教諭成尾英仁氏の原稿を頂いた。

8．本書掲載の出土遺物および各種実測図，各種写真は，指宿市教育委員会で保管している。

9．実測図No.，写真No.，文中のNo.等は一致する。

10．遺物観察表の表記基準については下記の通りである。

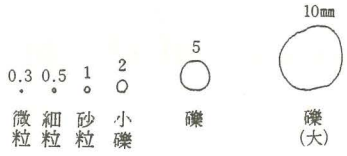
11．本書で用いるレベルはすべて絶対高である。

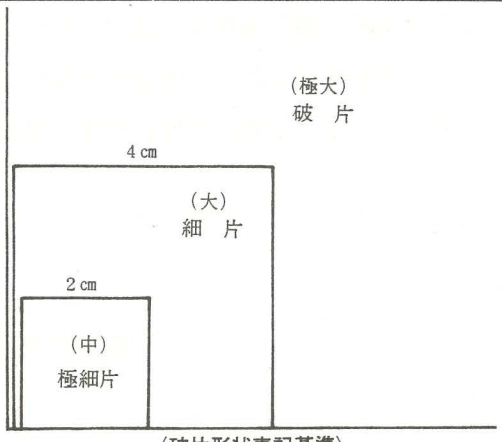
観察表表記基準図

1．粒度，破片形状，占有面積は下記基準に準じた。

2．色調については，「新版標準土色帖」1990年版に準じて表記した。

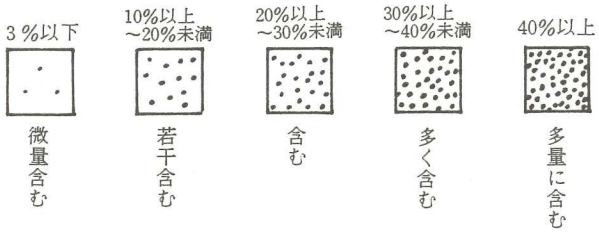
〈粒度表記基準〉





〈破片形状表記基準〉

〈占有面積表記基準〉



序　　文

本書は国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地の隣接地の確認調査結果をまとめたものであります。平成元年１月８日から同年１月28日まで20日間にわたって調査したものです。

調査成果の主なものを挙げますと，まず貞観16年（西暦874年）に発生した開聞岳の噴火によって埋没した建物跡の一部が発見されました。文献上に記録のある古代の火山災害址は全国で初めての発見です。

さらに，中世の建物跡が発見されました。平安時代に火山災害を受け，その中から，この地の人々が父祖の地を捨てず，再び生活を営むようになったのです。

また，第２次世界大戦の折に造られた防空壕跡も発見されました。このようにわずか75㎡の土地から出土したものを見ますと，指宿の歴史のあしあとがはっきりと刻まれていることがわかります。

この報告書が指宿の歴史を知る上で新たな資料となることと思いますし，さらに遺跡の適切な保存に活用されることを願ってやみません。

この発掘調査および報告書作成において，多くの方々にご教示いただきましたこと，また厳寒の時期に作業に携わった方々に深く感謝申し上げます。

平成３年３月31日

指宿市教育委員会教育長　中村　利　廣

目　　次

第１章　調査の概要……1
　第１節　調査の経緯……1
　第２節　位置と環境……1
第２章　橋牟礼川遺跡の地質……4
　第１節　地　　形……4
　第２節　橋牟礼川遺跡の地層……4
　第３節　橋牟礼川遺跡の地層の対比……7
第３章　橋牟礼川遺跡の概要……14
第４章　確認調査報告……16
　第１節　調 査 組 織……16
　第２節　層位の概要……16
　第３節　調査地点の層位について……18
　第４節　遺構・遺物について……21
第５章　考　　察……39

図・図版目　次

第１図　日 本 地 図……1
第２図　九 州 地 図……1
第３図　橋牟礼川遺跡周辺地形図……2
第４図　発掘調査地点周辺図……3
第５図　橋牟礼川遺跡付近の地形……4
第６図　橋牟礼川遺跡の地質柱状模式図……5
第７図　貞観16年噴出物紫コラの分布……8
第８図　遺跡内の古墳・平安時代噴出物……9
第９図　貞観16年噴出物の洪水層の例
　（新城氏宅地内）……11
第10図　古墳時代遺構配置図……15
第11図　奈良・平安時代遺構配置図……15
第12図　層位模式柱状図……17
第13図　グリッド東，北壁層位断面図……19, 20
第14図　遺構配置図……22
第15図　埋没建物遺構解説図……23
第16図　埋没建物跡検出状況図……25
第17図　埋没建物遺構倒壊過程模式図……25
第18図　溝状遺構検出状況図……26
第19図　奈良・平安時代の遺物(1)……26
第20図　掘立柱建物遺構Ａ……27
第21図　掘立柱建物遺構Ｂ……27
第22図　試掘トレンチ北壁層位断面図……28
第23図　縄文時代晩期土器実測図……29
第24図　古墳時代の遺物(1)……30
第25図　古墳時代の遺物(2)……32
第26図　縄文時代晩期土器及び
　古墳時代土器の標本
　資料……33
第27図　奈良・平安時代の遺物(2)……34
第28図　（図版１）……37
第29図　（図版２）……38
第30図　（図版３）……39
第31図　（図版４）……40

第１章　調　査　の　概　要

第１節　調査の経緯

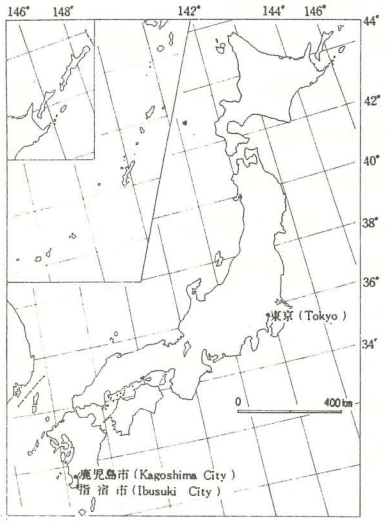
新城勝朗氏から国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地南側の隣接地に家屋を新築される旨知らされたのは平成元年10月５日のことであった。国指定史跡の北側はすでに周知の遺跡として確認されており，遺跡が国指定史跡の南側へ広がることも十分予想された。そのため，家屋建築に先立ち，平成２年１月８日より同年１月28日まで確認調査を実施した。調査は建物敷地部分を含む75㎡（10m×7.5m）について行った。第２次世界大戦時に造られた防空壕跡，中世の掘立柱建物跡等の遺構や古墳時代の遺物等を検出，さらに西暦874年の開聞岳噴火に伴い堆積した紫色固結火山灰層（通称紫コラ）の直下から火山灰に埋没した建物跡の一部を検出した。当初の家屋設計ではこの埋没建物遺構を破壊してしまう恐れがあったため，平成元年１月23日，新城氏と協議を行い，埋没建物遺構部分は掘削が及ばないよう駐車場に設計変更し，遺構を保存することになった。

調査はその後，グリッド内に一部試掘トレンチを設け，縄文時代遺物包含層まで確認した後，平成元年１月28日に終了した。　（文責　渡部）

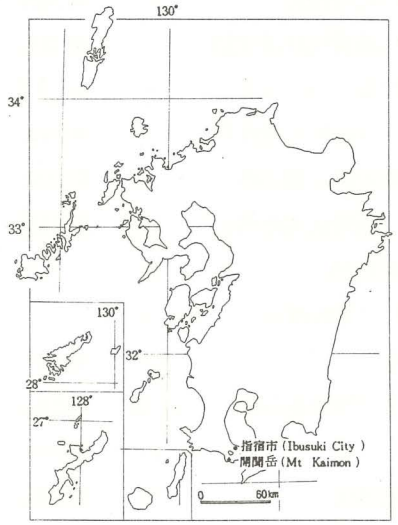
第２節　位置と環境

指宿市は薩摩半島の南端に位置している。地形的には山地・丘陵，台地，平野，湖沼と大きく４つに分けられる。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖形成時に堆積した火山噴出物は，指宿地方の直接的な地形形成要因となっている。また指宿市と南接する開聞町にはトロコニーデ型の火山として有名な開聞岳がある。その活動は有史以来，いくつかの史料に記録がみられ，開聞岳起源の固結火山灰が広くこの地方を覆っている。通称黄コラ（縄文時代後期降下），暗紫コラ（弥生時代中期降下），青コラ（古墳時代終末から奈良時代初頭降下），紫コラ（平安時代，西暦 874年降下）と呼ばれる火山灰は残存状況が良好で，各時代の文化層をパックしている。

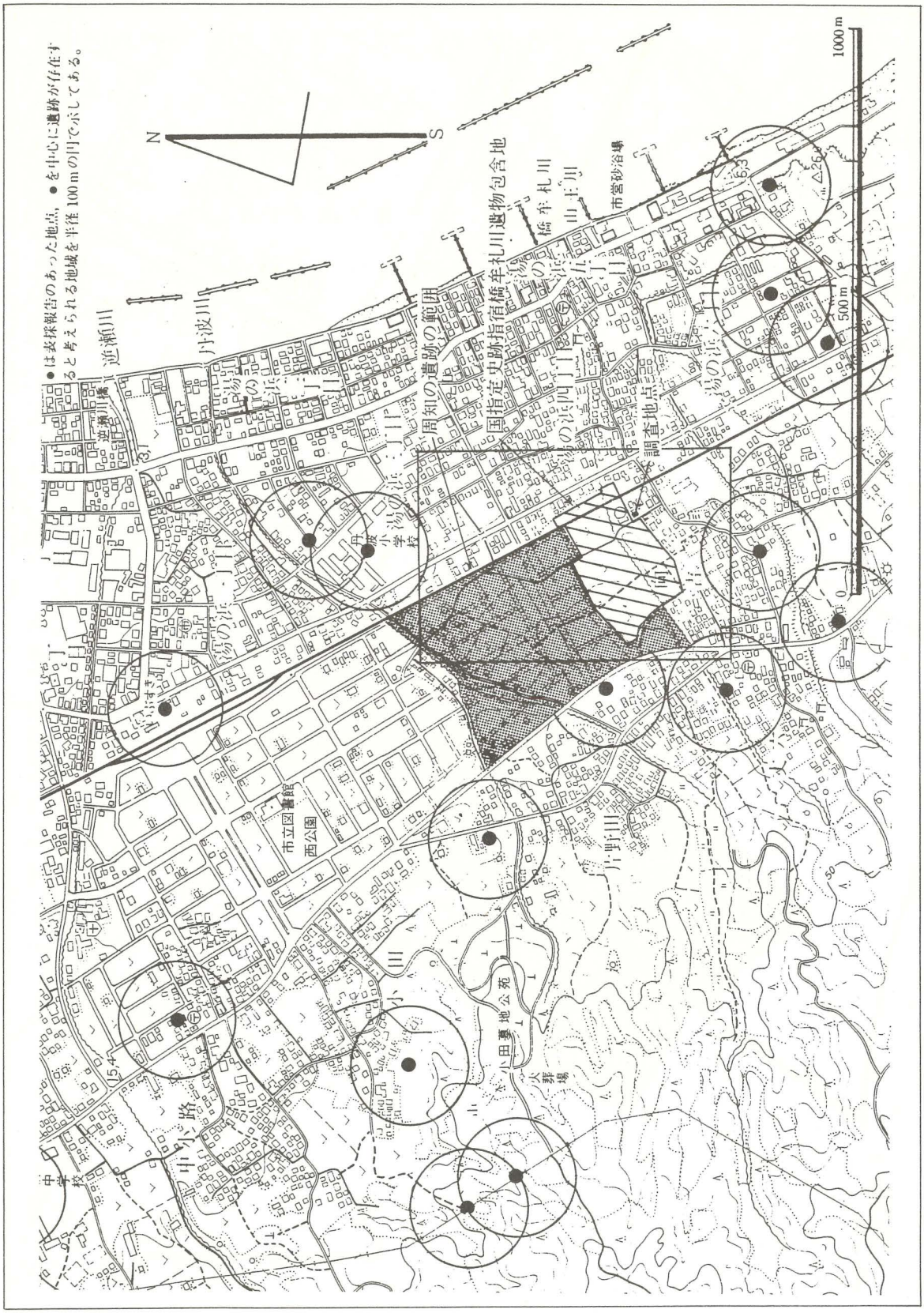
橋牟礼川遺跡は指宿市の市街地にあり，山裾から海岸へ傾斜する海抜７m～20m程度のゆるやかな微高地に形成されている。国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地は大正７，８年浜田耕作，長谷部言人博士らによって初めて発掘調査された。その結果，火山灰層をはさんで下層から縄文式土器，上層から弥生式土器が検出され，縄文式土器と弥生式土器の使用時期が異なることを我が国で初めて明らかにした遺跡として知られている。今回の調査は国指定史跡南側隣接地75㎡を対象に実施した。（文責渡部）



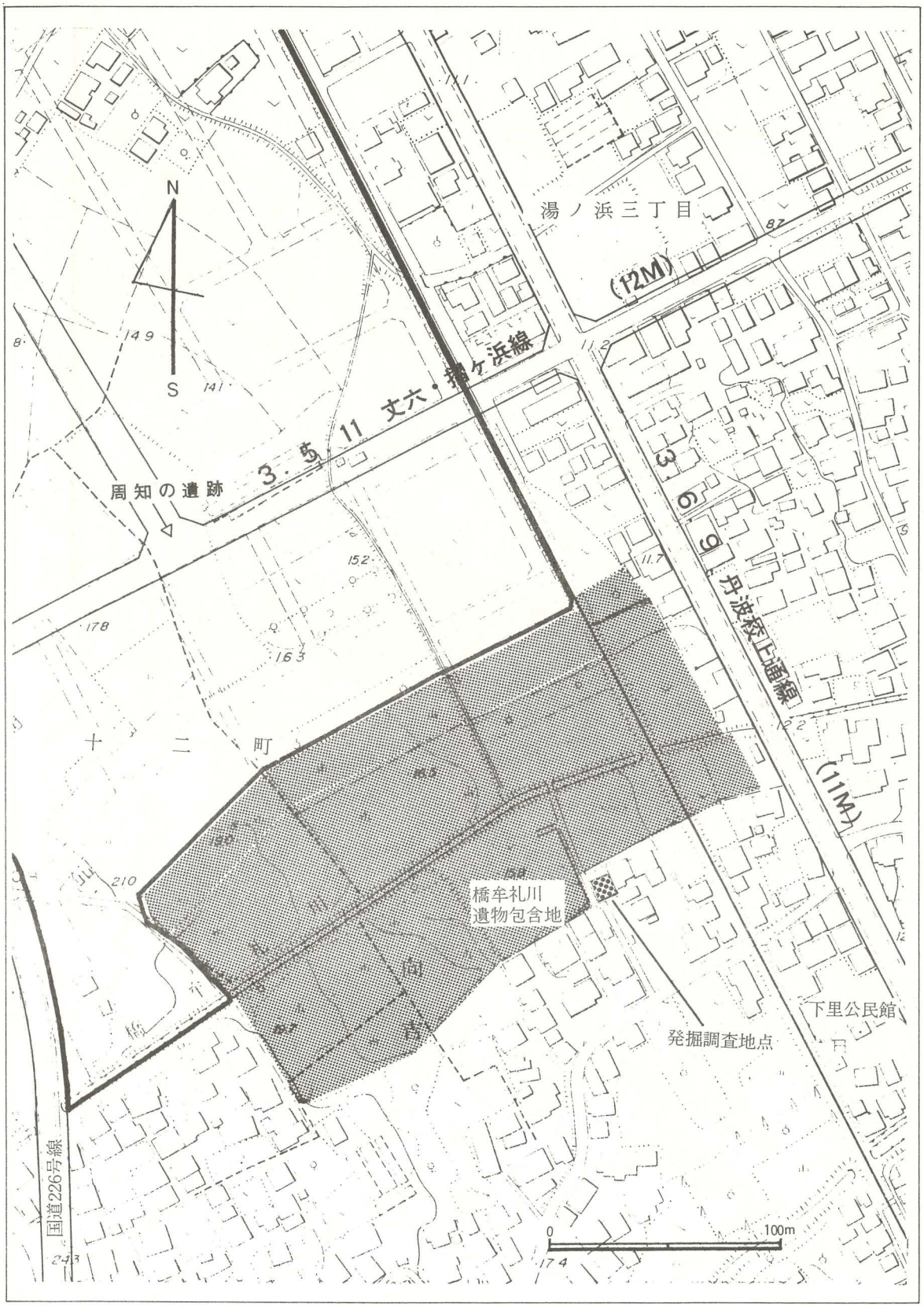
第１図　日本地図（Japan）



第２図　九州地図（Kyūshū Island）



第3図　橋牟礼川遺跡周辺地形図



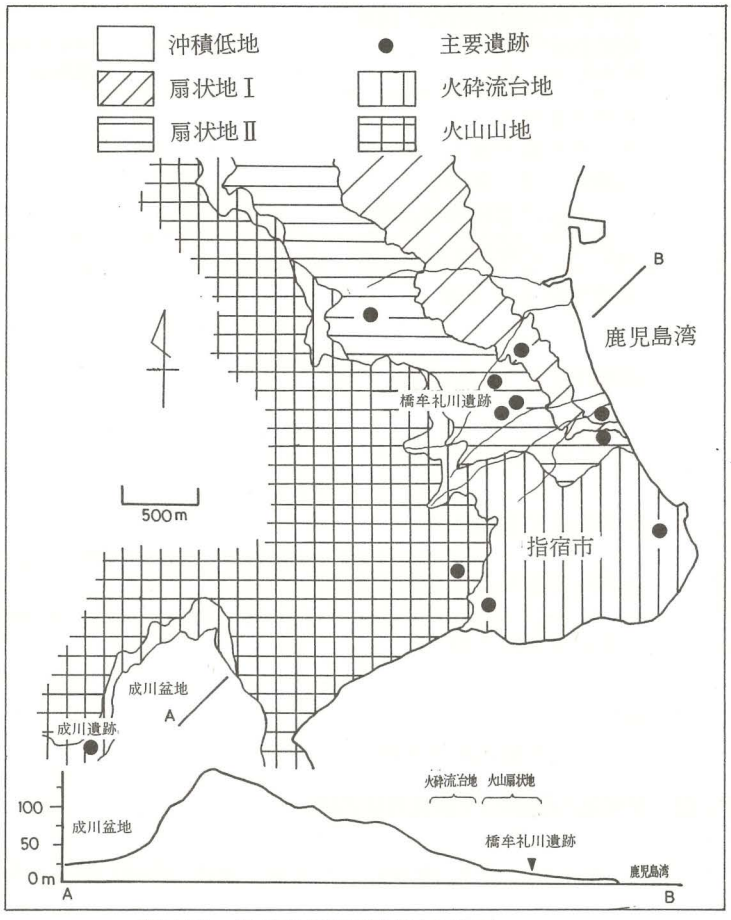
第4図　発掘調査地点周辺図

第 2 章　橋牟礼川遺跡の地質※

第1節　地　　形

指宿市は鹿児島湾の入口に位置し，西側はいわゆる鬼門平断層崖，東側は鹿児島湾に面している。指宿地方は第四紀後半の火山が集中する場所であり，それに関係する種々の地形が見られる。

橋牟礼川遺跡の西側には標高300m程度の火山が並んでいるが，いずれも阿多カルデラの中央火口丘群の一部をなすもので，主に安山岩・石英安山岩からなる成層火山・熔岩円頂丘であり，浸食により開析され，なだらかな山容となっている。



第 5 図　橋牟礼川遺跡付近の地形

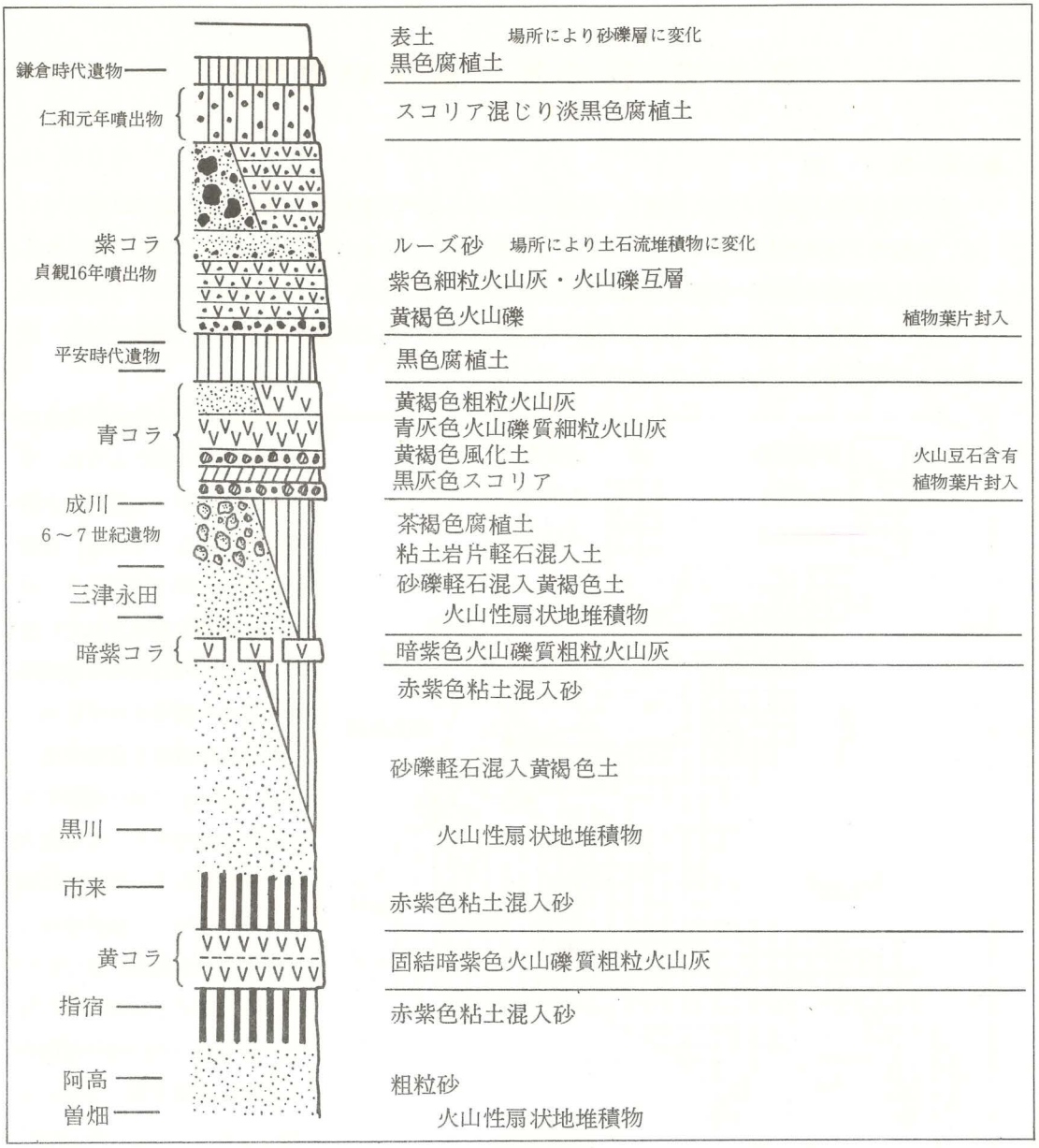
標高60mから20mの高さには山麓を取り囲むように，やや東側に傾斜した細長い火砕流台地が連なっている。台地の南側半分は山川ベース・サージ堆積物で構成されているが，北側半分は池田火砕流堆積物により構成されている。

橋牟礼川遺跡が立地する一帯は，緩やかに東へ傾斜する火山扇状地であり，火砕流台地を取り囲むように南北に細長くのびている。扇状地は台地側ではやや傾斜がきついが，市街地になるとほぼ平坦になり，それにつれ内部の堆積物も変化し砂礫を多く交えるようになる。このことから扇状地は大きく二つに区分することができる。火山性扇状地を切るように，火砕流台地付け根付近に源を持ち東流して鹿児島湾に注ぐ，山王川・橋牟礼川など数本の小河川が認められる。

第2節　橋牟礼川遺跡の地層

橋牟礼川遺跡の地層は，基本的には開聞岳噴出物とそれらの間に挟まる扇状地堆積物であるが，西側の標高の高い所と東側の低い所では，間に挟まる堆積物の厚さや種類に違いが認められる。

ここでは遺跡中央部の地層について，その特徴を簡単に述べることにする。



第6図　橋牟礼川遺跡の地質柱状模式図

1層・表層…どの地点においても認められるが，耕作の状況により厚さの変化や色調の変化が見られる。

2層・黒色腐植土…真黒色をした腐植土で，粘質はなくサラサラしている。いわゆる黒ボク土と称される。厚さはおよそ10cm程度でそれほど厚くない。

3層…やや黒色を帯びた腐植質土の中に，径2cm以下の安山岩礫・黒灰色スコリアの小片が混入しており，手でさわるとザラザラしている。乾くと白っぽくなり遠方からよく目立つ。厚さは場所により変化するが，平均約20cm程度である。

4層・紫コラ層…場所によって堆積相が変化することもあるが，基本的には成層した紫色細粒火山灰・火山礫互層であり，直下に径2cm以下の角張った黄褐色火山礫を伴っている。

上部と下部の層は極めて硬く固結している特徴があり，大半の場所でシダやチガヤなどの植物葉片を取り込んでいる。遺跡内の平坦地における全体の厚さは約80㎝である。

遺跡内の大半の地点で紫色火山灰・火山礫互層は砂礫層に変化するが，最下部の黄褐色火山礫はどの地点においても水成作用を受けていない。

5層・黒色腐植土…真黒色の腐植土で通常5㎝以下の厚さであるが，大半の地点で認めることができる。場所によっては上端面が波状になり，20㎝近くの厚さに達することもある。

6層・青コラ層…場所によって堆積相が変化することもあるが，基本的には上部が黄褐色粗粒火山灰，中部が固結した火山礫混じり青灰色細粒火山灰，下部が発泡良好な径2㎝以下の黒灰色スコリアの層である。中部の青灰色細粒火山灰には，径1～3㎜大の同色の火山豆石が多数含まれ，さらに細長く引き伸ばされた径1㎜程度のガスの抜けた穴が点在している。紫コラ同様植物片を取り込んでいる。全体の厚さは約40㎝である。

遺跡内の所々で本層の上部層は砂礫層に変化しているが，砂礫層の厚さは最大でも70～80㎝程度であり，上位の紫コラの砂礫層に比較して薄い。場所によっては砂層中に軽石が点在したり，黄橙色をした風化火山礫の小礫が薄く層をなすこともある。

7層…下位にある黒灰色スコリア質粗粒火山灰層の風化土で，全体に汚れた黄橙色を呈していることから，若干の腐植を含むものと思われる。大半の地点で粗粒火山灰の下位にある同質の堆積物と一体となり，ほとんど識別できなくなる。薄い所では厚さ5㎝程度であるが，場所によっては20～30㎝になることもある。

8層・黒灰色スコリア質粗粒火山灰層…断片的にブロック状に薄く堆積する粗粒火山灰で，まれに5㎜以下の黒灰色スコリアを含むことがある。多くの場所で失われているが，低所や流水の作用の少なかった所には，層になって連続して堆積する。層の厚さは平均約5㎝である。

9層…汚れた黄橙色を呈する弱粘質土で，場所により堆積相の変化が見られる。遺跡内の平坦な場所では，径1㎝以下の安山岩火山礫を比較的多く含み，全体にザラザラした手触りである。場所によってはやや腐植含有量がおおくなり，黒味が強くなっている。旧地形の低所に沿った場所では，赤色や黄色の粘土塊・岩片・軽石の混ざった砂礫層になっている。また標高の低い地点では，クロスラミナの発達した砂礫層になっている。厚さは50㎝～1ｍ程度である。

10層・暗紫コラ…黒灰色スコリア質粗粒火山灰層で，上位にある8層をつくる同質の火山灰と区別しにくい。厚さは5㎝程度で断片的でブロック状に堆積している。全体に弱く固結している。

11層…やや黒味を帯びた黄橙色を呈する弱粘質土で，場所により堆積相の変化が見られる。上位にある同質の堆積層に較べ，池田降下軽石・山川ベースサージ起源の軽石の混ざる割合が多くなる。また場所によっては砂層になったり粘質の強い層になったりしており，色調も褐色や赤黄色などに変化する。厚さは50㎝～1ｍ程度である。

12層・黄コラ…上部の黄色細粒火山灰と，下部の黒灰色スコリア質粗粒火山灰の二層からなるが，大半の地点で黄色火山灰は失われている。全体に弱く固結しており，厚さ約5㎝のブロック状に堆積している。

13層…粘質土と粗粒砂を主体とする層で，下部ほど砂の割合が多く軽石の含有量も多くなる。

第３節　橋牟礼川遺跡の地層の対比

１．指宿火山活動略史

指宿地方の火山はいわゆる阿多カルデラに関係して形成されており，その主要な活動時期は鬼界―黒葛原火山灰（Ｋ－Ｔｚ，西之表軽石流）と入戸火砕流堆積物の間，およびアカホヤ（幸屋火砕流堆積物）堆積直前から約1,100年前までの間の二回である。

後半の主要な火山活動は約5,500年前に発生した池田カルデラの活動であり，それに関係して山川湾，成川盆地，松ケ窪，鏡池，水無地などのマールが形成されている。

その後，約4,000年前の縄文時代後期になると池田火砕流台地南側末端で噴火が再開し，開聞岳の形成が始まった。開聞岳噴出物は南薩地方全域から大隅半島中～南部にかけ広く堆積しているが，野外における露頭観察から主要な活動は四回あったことがわかっている。四回の火山活動による噴出物は外見上それぞれ特徴的な色彩を帯びており，下位から黄コラ，暗紫コラ，青コラ，紫コラと俗称されている。

２．開聞岳の初期～中期活動

(1)　黄コラの噴出

指宿地方では池田湖火山灰の上部に，黒色腐植土を挟んで数十㎝の厚さの黄色を帯びた硬質火山灰を主とする噴出物が堆積している。噴火はいくつかのステージに区分することができるが，山川町の成川遺跡付近では細粒の硬質黄色火山灰，粗粒黒色火山灰，細粒の硬質黄色火山灰の順に堆積している。黄色火山灰には細かいラミナの発達した部分が見られ，また多量の火山豆石を含んでいることからマグマ水蒸気爆発もあったと推定される。噴出物の分布は開聞岳を中心に楕円状であり，南薩の頴娃町・知覧町に分布するコラ層の一部を形成し，対岸の大隅半島南部にも薄く堆積している。

山川町成川遺跡と開聞町田中遺跡では，黄コラの直下から指宿式土器が出土しており，また数個の^{14}Ｃ年代も約4,000年である（石川・他，1979など）ことから，縄文時代後期に噴出したと推定される。

(2)　暗紫コラの噴出

縄文時代後期から晩期にかけては，狭い範囲にスコリアや火山灰を噴出するような，比較的穏やかな噴火を繰り返し山体を成長させているが，それらは黄橙色に風化したスコリアと黒色腐植土との互層になっている。

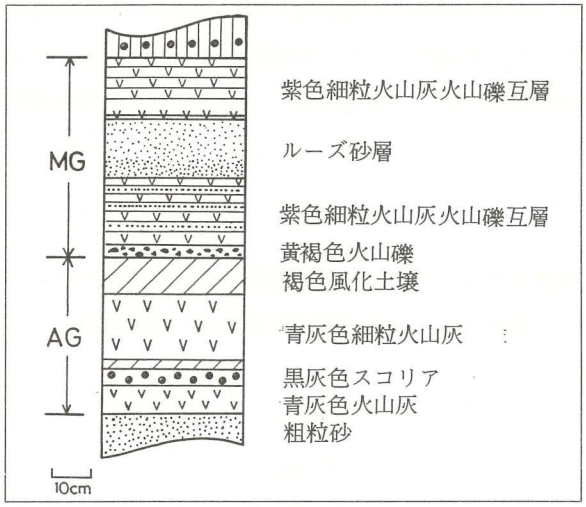
その後，山ノ口式土器の時代になると開聞岳噴火史上最大の噴火が発生し，溶岩の流出やスコリア・火山灰の堆積があった。この噴出物は指宿地方の広い範囲に堆積しており，開聞町・頴娃町・知覧町のコラ層の主体をつくっている。暗紫コラは噴出起源に近い頴娃町東部では下位の黄コラの上に黒色腐植土を挟んで堆積しているが，西側の知覧町などでは両者が一体となっていることもある。噴出物は本質物のスコリアや溶岩が主体であり，マグマの直接的な噴火であったと考えられる。ただ噴出物の一部に細粒の硬質火山灰が挟まっており，遠方では植物葉片も取り込んでいることなどから，火山噴出物中に水分の量が多かったと思われ，マグマ水蒸気爆発もあったことがわかる。対岸の大根占町山ノ口遺跡では山ノ口式土器

の表面に暗紫コラが付着しており，成川遺跡では暗紫コラの上下から山ノ口式土器が出土し，その土器に伴う炭化物の^{14}C年代が約2,000年前であること(1)などから，弥生時代中期末に噴出したと推定される。

3．古墳時代の噴火

(1) 噴火の過程と噴出物の性質

古墳時代に発生した噴火は，間に挟まる風化土または黒色腐植土の存在により，大きく二つのステージに分けることができる。遠方では下部の層が欠如し上部の層のみが堆積している。上部層はスコリアと硬く固結した火山礫混じり青灰色の細粒火山灰，および黄褐色粗粒火山灰であるが，青灰色細粒火山灰は多量の火山豆石を含んでおり，またガスの抜けた穴が認められる。一般に青コラと俗称されている。



第7図　遺跡内の古墳・平安時代噴出物

① 前期ステージ

初期の噴火はかなり激しいマグマ爆発で，発泡良好な粗粒のスコリアを多量に噴出したが，中期になるとやや穏やかになり中粒のスコリアを噴出した。その後，小規模な噴火を繰り返した後，粗粒の火山灰や細粒スコリアを噴出し終息した。

噴火後しばらく平穏な時代が続き，噴出物の風化や黒色腐植土の集積がおこなわれたが，層の厚さは数cm程度であり休止期はそれほど長くなかったと推定される。

② 後期ステージ

後期になると本格的噴火活動が発生したが，噴出物の性質の違いから大きく三回の噴火に分けることができる。

まず最初にマグマ爆発が発生し，やや発泡した岩片や発泡良好なスコリアを多量に噴出した。一連の噴出物は主に北北東方向に降下し，成川遺跡や橋牟礼川遺跡付近まで堆積している。

スコリアの噴出に引続いて小粒の火山礫混じり細粒火山灰を噴出したが，さらに連続して細粒の青灰色火山灰を主体とする噴火があった。その中には米豆大以下の火山豆石が多量に入っており，またガスの抜けた痕が長さ数mm，径2mm程度の穴となって残っている。

噴出源から遠く離れ下部のスコリアが欠如している所では，火山灰の中にシダ植物やチガヤなどの植物葉片が入っている。火山灰全体は硬く固結している。

その後小火山礫を含む火山灰を噴出し，引続いて黄褐色の火山灰を噴出した。火山礫は風化しオレンジ色を帯びている。

(2) 発生時期

古墳時代噴火の発生時期については，噴火の記録が残されていないので正確には断定できない。開聞岳周辺でこの噴出物が堆積している遺跡は，成川遺跡・橋牟礼川遺跡・新番所後遺跡・横瀬遺跡であるが，そこでは成川式土器の笹貫タイプを確実に覆っている。橋牟礼川遺跡では噴出物の上から8世紀頃の土器が出土しており，噴火が笹貫タイプの時期に発生したことはまちがいない。笹貫タイプの土器の年代および共伴する遺物の年代から，6世紀後半～7世紀前半頃に噴出したと推定される。

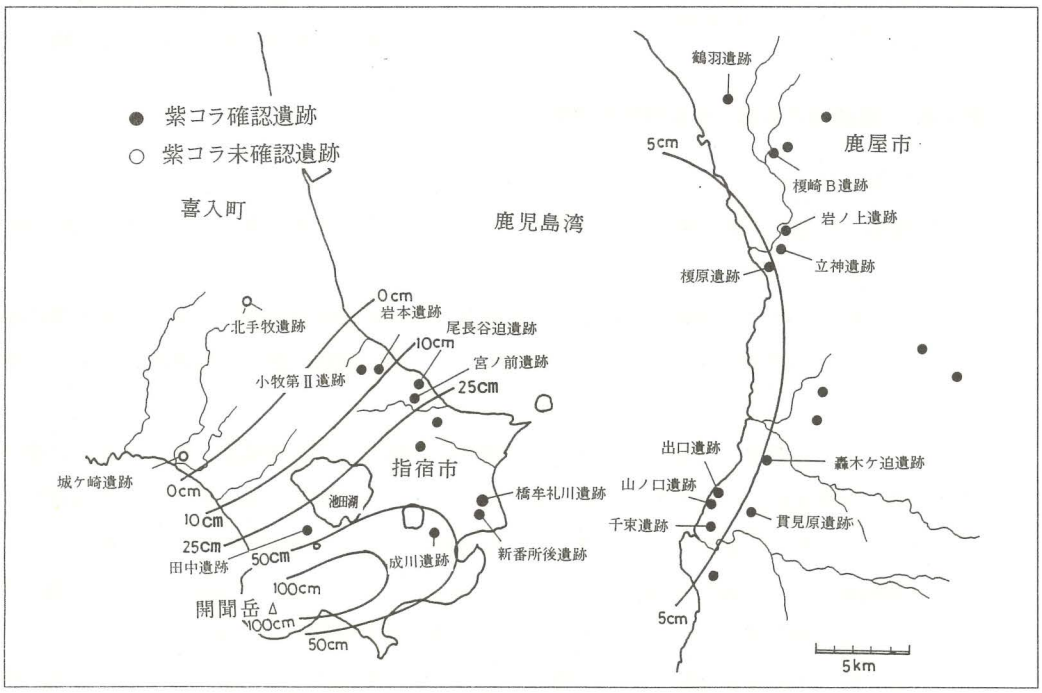
(3) 橋牟礼川遺跡における噴出物との対比

前述のように橋牟礼川遺跡では，6層の青コラは上部が黄褐色火山灰，中部が固結した火山礫混じり青灰色細粒火山灰，下部が発泡良好な径2㎝以下の黒灰色スコリアの層である。中部の青灰色細粒火山灰には，径1～3㎜大の同色の火山豆石が多数含まれ，さらに細長く引き伸ばされた径2㎜程度のガスの抜けた穴が点在し，多くの植物葉片を取り込んでいることから，開聞岳付近の古墳時代噴出物の特徴とよく一致しており，6層の青コラは古墳代噴出物に対比される。

4．平安時代の噴火

(1) 噴火の過程と噴出物の性質

平安時代に発生した噴火は，間に挟まる厚さ2～3㎝の黒色腐植土により二つのステージに分けることができるが，後述のように前期ステージは貞観16年噴火に，後期ステージは仁和元年噴火に比定することができる。



第8図　貞観16年噴出物（紫コラの分布）

① 貞観16年噴火

最初の噴出物は暗灰色の軽石であったが，ついで直径10㎝～数㎝（まれに３ｍに達する）の本質・類質の火山岩片を主とする，最大層厚30ｍにも達する火山礫・火山灰混じりの成層した爆発角礫（kmγ）を南東～西側斜面に噴出した（中村，1967）。最近の藤野・小林（1990）の調査で，噴出物中に多数のパイプ構造が認められ火砕流堆積物であることが判明した。

開聞岳から東側に離れた地点では，きわめて細粒の明紫色火山灰が付着した黄褐色火山礫が最下部に薄く堆積している。火山礫はおもに類質の安山岩であるが，いずれも親指～小指大で角張っており，風化し薄い黄橙色を呈するものも見られるが，この火山礫層は中村のkmγに対比されると考えられる。

火山礫の上には細粒火山灰・火山礫互層が堆積しているが，全体にきわめて硬く固結し紫色を呈している。開聞岳に近い所では，全体の厚さは1.5ｍである。

場所によって厚さは異なるが，開聞岳に近い所でも遠い所でも本噴出物の内部には水成堆積物が認められ，貞観16年噴火に際し広範囲で洪水が発生したと推定される。

② 仁和元年噴火

噴火はまず白色の細粒火山灰の噴出で始まったが，それに引続き本格的火山活動が発生した。噴出物の特徴により，噴火は二つのステージに分けられる。最初のステージでは，火山砂混じり火山礫を主とする噴火を行っているが，間に挟まる火山灰によって三回の噴火に分けることができる。

次のステージはかなり激しい噴火であり，火山礫まじりスコリアを多量に噴出するマグマ爆発であった。初期のスコリアの粒径は小さいが，中期頃になると開聞町川尻付近でも人頭大以上になり，噴火が徐々に激しくなったことを示している。しかし，その後はスコリアの粒径が小さくなることから，噴火は衰えていったことがわかる。藤野・小林(1990)はスコリアの噴出を５つのユニットに分け，最後の２つのユニットに対応して火砕流が発生したことを指摘している。

開聞岳の頂上付近には安山岩質のドームがあるが，その上にはスコリアや火山灰などの噴出物が認められないことから，ドームの形成は一連のスコリア噴出の後に行われたと推定される。

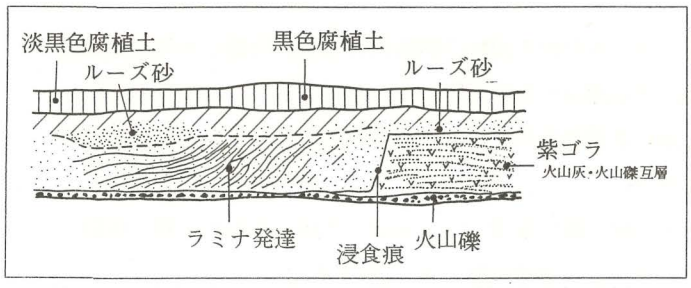
(2) 発生時期

開聞岳の最後の噴火は平安時代に編纂された日本三代実録に記録されているが，野外における次のような事実から，火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層が貞観16年噴火に伴う噴出物と解釈され，その上部にある火山礫・スコリアは仁和元年噴出物に対比することができる。

①火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層，およびスコリア層は表土直下に堆積しており，指宿地方では最後の噴出物である。②開聞岳の噴出物は，火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層，およびスコリア層が最後であり，噴火記録は平安時代噴火以降無いこと。③火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層，およびスコリア層の直下から出土する須恵器などの遺物は，

9世紀後半のものである。④火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層，およびスコリア層直上から出土する遺物は，鎌倉～室町時代の内黒土師器などである。⑤噴火記録の中に降雨と河川氾濫の記述があるが，指宿地方の広い範囲で紫色火山灰・火山礫互層中に水成堆積物が認められる。

⑤については例えば図のように，最下部の火山礫上に硬質の紫色細粒火山灰・火山礫互層が堆積し，それらをえぐり取るように砂礫層が堆積している。橋牟礼川遺跡では，きわめてラミナの発達した砂礫層や紫色の色調を帯びた砂礫層，径50cmにも達する安山岩・凝灰岩片を含む砂礫層が，旧河川に沿った細長い場所に堆積している。記録によれば，噴火は3月4日（旧暦）夜に発生し翌5日の夕方まで続いたが，降雨と河川の氾濫は5日夕方に生じており，火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層の上部に，前述のような水成堆積物がみとめられる事実とよく一致している。このことから，火山礫と紫色細粒火山灰・火山礫互層は貞観16年噴出物に対比され，その上に薄い黒色腐植土を挟んで堆積するルーズな火山礫・スコリア層は，仁和元年噴出物に対比することができる。



第9図　貞観16年噴出物の洪水層の例（新城氏宅地内）

(3)　橋牟礼川遺跡の噴出物

前述のように4層は，上部が弱く成層した紫色細粒火山灰・火山礫互層で，中部がルーズな砂層，下部が強く成層した紫色細粒火山灰・火山礫互層であり，直下に径2㎝以下の角張った黄褐色火山礫を伴っていること，上部と下部の層はきわめて硬く固結している特徴を持つこと，大半の場所でシダやチガヤなどの植物葉片を取り込んでいることなどから，開聞岳付近の貞観16年噴出物の特徴とよく一致しており，4層を貞観16年噴出物に対比することができる。その上位にあるスコリア混じりの3層は，仁和元年噴出物に対比することができる。

ところで，橋牟礼川遺跡ではこれまで数次の発掘が行われているが，その層序と本報告の対比，および新番所後遺跡・中村の層序との対比は表のようである。

〈註〉　(1)　「成川遺跡」鹿児島県教育委員会　1982

〈参考文献〉

中村真人　　P119-131『開聞岳の火山噴出物と火山活動史』「火山　第2集　第12巻」1967

成尾英仁　　P1－14　『開聞岳と遺跡』「隼人文化　第18号」1986

藤野直樹・小林哲夫　P16『開聞火山の地質』「日本火山学会1990年秋期大会講演要旨集」1990

※成尾英仁（鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校教諭）の玉稿を賜った。

第1表　橋牟礼川遺跡の層序対比表

本報告	濱田	有田・他	石川・他	河野・他	井ノ上・弥栄	中村
表土 腐植土	火山灰	表土		表土 腐植土	耕作土	
スコリア混入黒色腐植土				黒色火山灰 褐色火山灰 含礫褐色火山灰	礫混じり黒色火山灰	Kmα 885年噴出物
固結紫色火山灰・火山礫互層 灰黒色砂 固結紫色火山灰・火山礫互層 褐色火山礫	泥流盤	泥溶岩	火山灰 含安山岩礫黒褐色火山灰 黒褐色火山灰 暗茶褐色火山灰	紫色溶結コラ 褐色粗粒火山灰	明紫色溶結火山灰 灰褐色火山砂礫層 紫色溶結火山灰層 暗黄褐色スコリア火山礫	Kmγ 874年噴出物
黒色腐植土 灰黄色粗粒砂・礫層	火山灰		砂礫 茶褐色ローム様火山灰	黄褐色弱粘質火山灰	暗褐色砂礫混入粘質土層 灰色砂層	
黄褐色粗粒火山灰 固結青灰色火山礫質火山灰 黒灰色スコリア		泥溶岩	黒色溶結コラ	青灰色溶結コラ 褐色中粒質火山灰	暗青灰色溶結火山灰層 暗青褐色スコリア火山礫	Kmδ
茶褐色土 黒灰色スコリア				褐色火山灰		
黒色腐植土／火山扇状地堆積物		含安山岩礫火山灰	黒褐色ローム	黒褐色火山灰	暗褐色小礫腐植土層	
暗紫色含火山礫固結火山灰				暗紫溶結コラ	赤褐色小礫混入土層 褐色土層 赤褐色小礫混入土層	Kmθ
黒色腐植土／火山扇状地堆積物		赤褐色砂礫	暗黄褐色ローム質火山灰	含軽石黄灰色ローム	暗赤褐色粘質土	
				青灰色砂	褐色砂礫混入粘質土	
固結黒灰色粗粒火山灰		含安山岩礫火山灰			灰色溶結火山灰	Kmπ
火山扇状地堆積物	火山灰	含長石火山灰 灰色砂		含軽石茶褐色ローム 粘質ローム 池田二次シラス	暗褐色粘質土 明茶褐色砂混入粘質土	

濱田耕作（1921）；薩摩国揖宿郡指宿村土器包含層調査報告　有田忠雄・村野守次・他（1948）；鹿児島国立公園候補地学術調査報告指宿土器包含層　石川秀雄・他（1977）；国指定史跡　指宿橋牟礼川遺跡包含地
河野治雄・他（1977）；新番所後遺跡　井ノ上秀文・弥栄久志（1980）；橋牟礼川遺跡　中村真人（1967）；開聞岳の火山噴出物と火山活動史

第３章　橋牟礼川遺跡の概要(1)

橋牟礼川遺跡は縄文式土器と弥生式土器の使用時期が異なることを我が国で初めて明らかにした遺跡として知られている。近年の発掘調査の結果，学史上重要な発見に加え，古墳時代から奈良・平安時代にかけての貴重な遺物・遺構が検出されている。（第10図・第11図参照）

火山災害遺跡としての側面

開聞岳噴火に伴い堆積した火山灰はその時点での種々の情報を保存している。特に平安時代の開聞岳噴火と災害状況は『日本三代実録』に記録がみられ，発掘調査の成果と文献記録の一致から紫色固結火山灰層（通称紫コラ）が貞観16年（西暦 874年）の噴火に伴い堆積したものであることが確認された。この紫コラの直下からは，「真」，「府」と書かれた墨書土器，鍍金された丸鞆，巡方，須恵器の蓋を転用した硯，須恵器，土師器，鉄器，古銭，牛馬骨等の遺物が出土している。こうした遺物は官衙の存在を示唆するもので，火山災害をうけた官衙跡の遺跡として位置付けられよう。遺構では，広範囲にわたる畝状遺構（プラント・オパール分析の結果，陸稲，アワ，ヒエが栽培されていたことがわかった），古墳時代より継続し形成された貝塚，火山灰の重圧によって倒壊・埋没した掘立柱建物跡等が検出されている。また旧河川や大規模な土石流跡も検出され，二次災害を含め，文献記録との対応から火山災害の過程を追うことが可能である。青色固結火山灰層（通称青コラ）の直下からも，焚火跡や貝塚等の遺構や様々な遺物が検出されており，古墳時代終末から奈良時代始めのいずれかの時期にも大きな火山災害を受けたと考えられる。

５世紀～６世紀にかけての大集落

青コラの下層から５世紀～６世紀に該当すると考えられる大規模な集落跡が検出されている。面積約900㎡の調査で，最低150基の住居跡が検出された。また，断面Ｖ字形の溝，貝塚，土器集中廃棄所，鍛冶遺構等も検出されている。

遺物では５世紀～６世紀代の須恵器，成川式土器と総称される在地色の反映された土師器，釣針，鉄鏃，鋤先，鉄斧，刀子等の豊富な鉄器類，銅鏡片，青銅製鈴等の青銅製品，土製管玉，土製丁子字頭勾玉，石製勾玉，子持勾玉，軽石製舟形模造品や砥石，台石，石皿，敲石，磨石，凹石，磨製石鏃等の石器類，高坏の脚部を利用したふいごの羽口などが出土している。

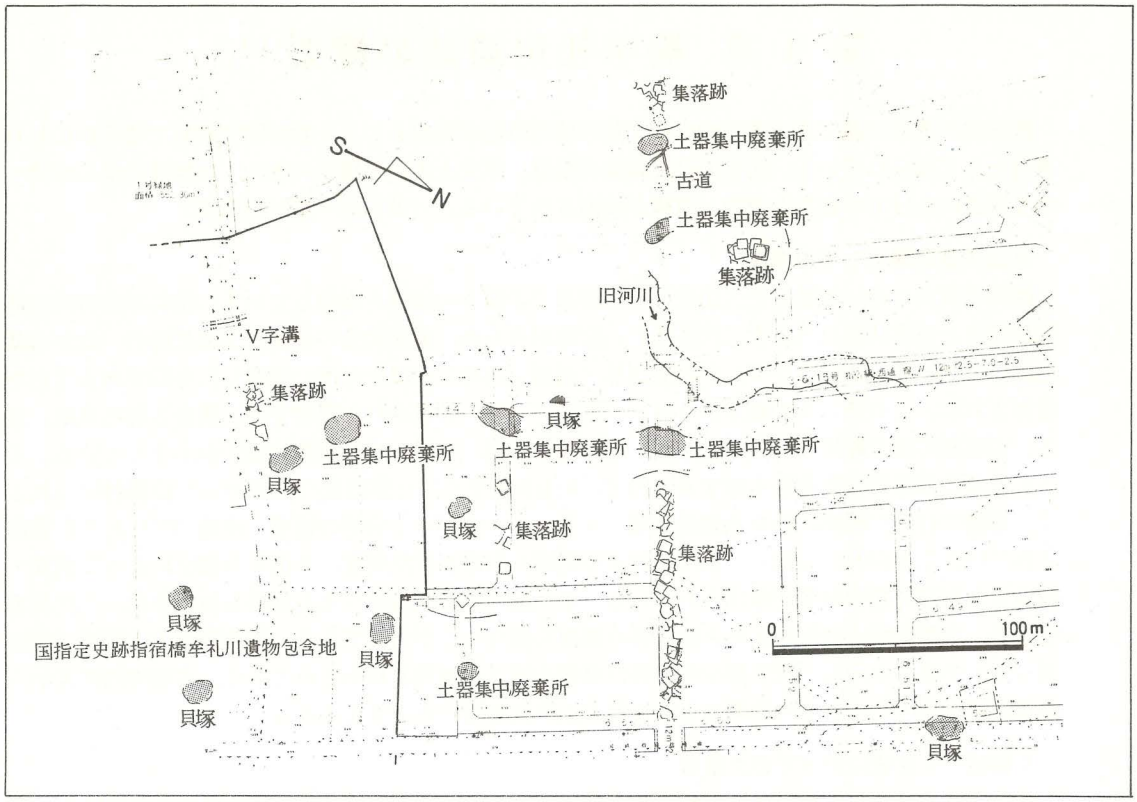
火山災害と文化変遷

橋牟礼川遺跡は縄文時代中期から平安時代に至る一連の開聞岳の活動と災害及びこの地域における文化の変遷が極めて良好な状態で対照できる遺跡である。

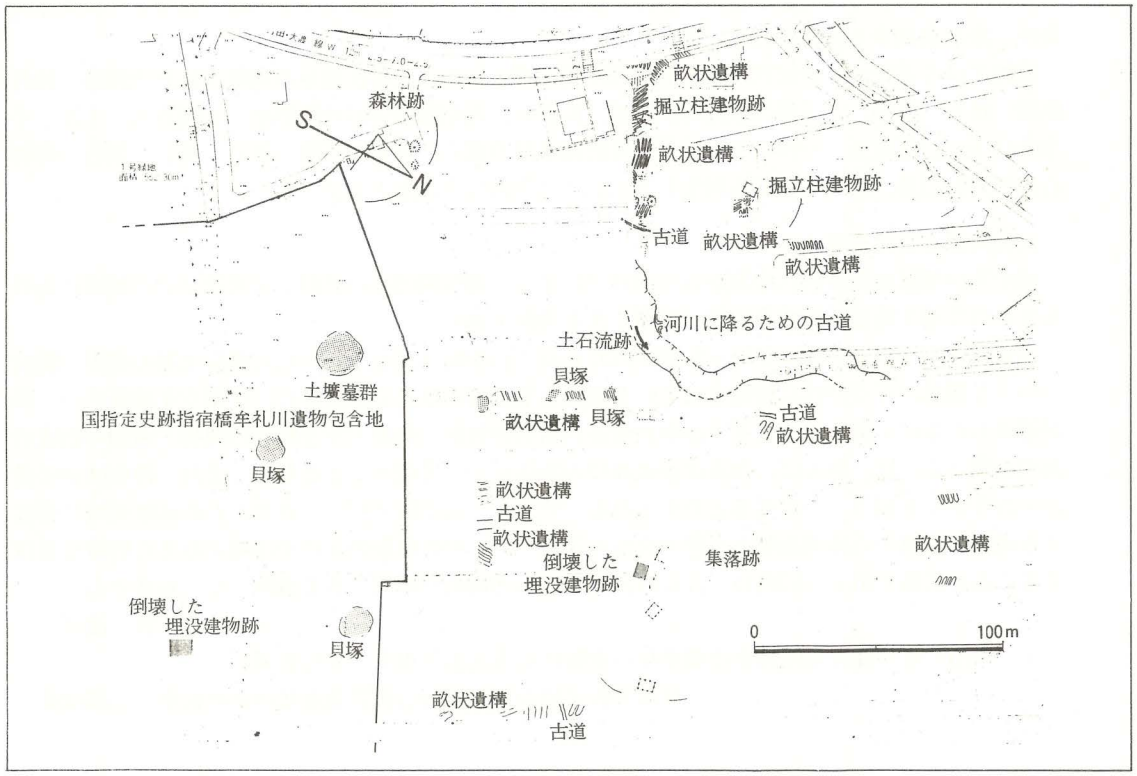
古墳時代から平安時代にかけて形成された貝塚や古墳時代にもちいられた甕形土器の突帯や脚台といった属性が平安時代に使用されている甕形土器に継承されている点は，生業や生活様式の一部が連続したものであったことをうかがわせる。古墳時代から奈良・平安時代の遺物・遺構の組成の異同を問うことは，例えば，律令体制の波及の実状について問うこととなり，また，律令体制の受容のありかたを問うことになると考えられる。そして，火山灰でパックされたためほぼ共時に存在する遺物・遺構から開聞岳噴火に伴う火山災害がそれぞれの時期の文化や環境に与えた影響を追求することが可能であると同時に，文化内容の変遷を通時的に解釈できる遺跡として重要である。

（文責　渡部）

(1)　下山　覚『鹿児島県指宿市橋牟礼川遺跡に見る火山災害史と文化変異』
日本考古学協会第56回総会研究発表要旨より転用，一部改変



第10図　古墳時代遺構配置図（平成２年度現在）



第11図　奈良・平安時代遺構配置図（平成２年度現在）

第４章　確認調査報告

第１節　調査組織

発掘調査責任者	指宿市教育委員会教育長	中　村　利　廣
発掘調査担当者	社会教育課長	川　嵜　　猛
	〃　主幹	山　澤　郁　夫
	〃　主査	田　代　秀　敏
	〃　主事	弓　指　恒　子
	派遣社会教育主事	古　市　　通
	社会教育課主事	園　田　猛　志
発掘調査員	〃　主事補	下　山　　覚
発掘調査補助員	非常勤職員	渡　部　徹　也

発掘調査作業員

山上　美保子・田之畑喜美子・福留　幸・末吉　キヌ子・向吉　ひで子・原田　千恵子・永嶺　春代・今林　定子・坂本　由子・下高原眞弓・田之畑チエ子・諸留　キヌ子・西花　ひで子・林山　イネ・竹下　カツエ・吉満　淳子・小園　信子・大岩本　富子・井上　ヒサ子・吉満　チエ子・東　冨子・前　幸男　（順不同）

整理作業員

新小田　香代子・清　秀子

この他，整理作業にあたっては，徳留逸子・前田恵子・古川貴幸の協力を得た。

また，発掘調査にあたり，多くの方々の協力と助言を得た。記して感謝の意を表したい。

鹿児島県教育委員会文化課	新　東　晃　一
〃	中　村　耕　治
鹿児島市立玉龍高等学校教諭	成　尾　英　仁

（順不同）

第２節　層位の概要

橋牟礼川遺跡の地層は，大きく19層に分層できる。層位模式柱状図には橋牟礼川遺跡の標準層序と今回調査した地点の層序を対応させた形で示してある。

橋牟礼川遺跡標準層位について

第１層　黒褐色土層…表土（１層）

第２層　暗灰色土層…近代～現代の包含層。場所によっては欠落している。（２層）

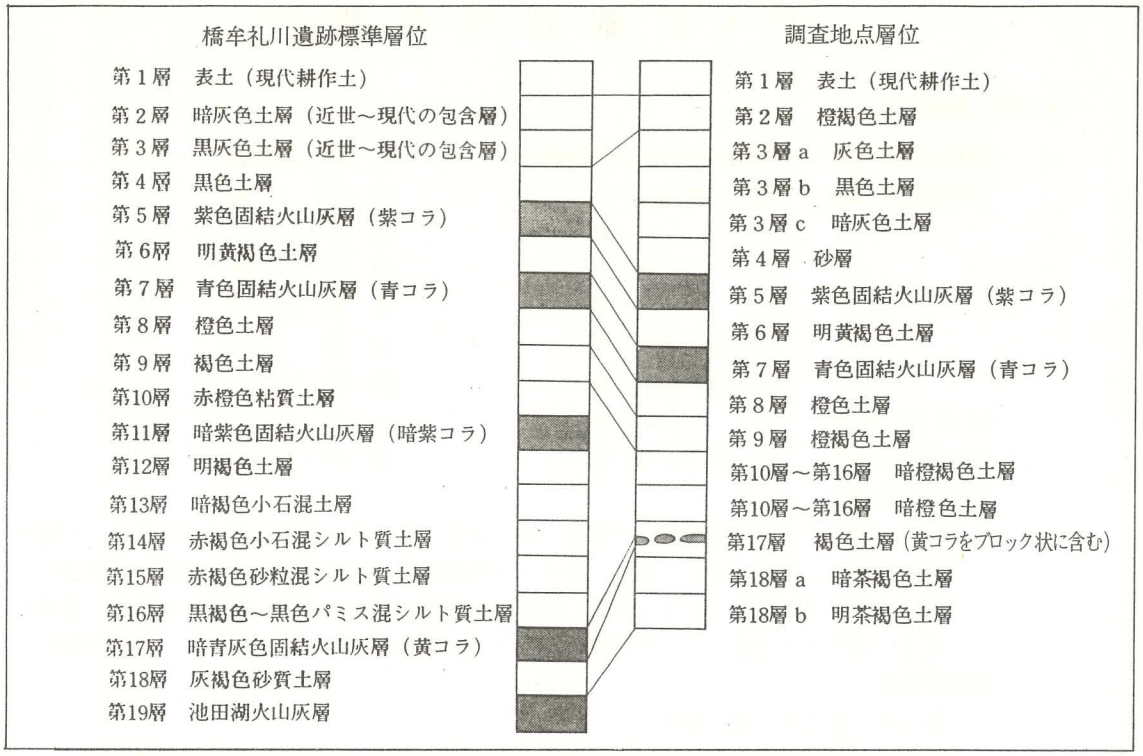
第３層　黒灰色土層…近代～現代の包含層。場所によっては欠落している。（２層）

第４層　黒色土層…中世（鎌倉～室町時代）の遺物を包含する。（３層）

第５層　紫色固結火山灰層…（紫コラ，平安時代貞観16年；西暦874年）の開聞岳起源噴出物である。紫色を呈し硬く固結している。細粒の火山灰と火山礫が成層構造をなしていることからマントルベッディングに基づく堆積と考えられる。最下部には２㎝～３㎝程度の細礫層が堆積している。（４層）

第６層　明黄褐色土層…平安時代遺物包含層。８世紀中頃から９世紀にかけての須恵器・土師器等を包含する。場所によっては腐植化が進行し黒色を呈する。（５層）

※（　）内の層名は，第２章・第２節「橋牟礼川遺跡の地層」の表記で，考古学的観察による分層と対比させる意味で記してある。



第12図　層位模式柱状図

第７層　青色固結火山灰層（青コラ）…古墳時代終末から奈良時代初頭のいずれかの時期に堆積した開聞岳起源噴出物。青色を呈し，硬く固結している。最下部には１㎝～２㎝程度の厚さでスコリア層が形成されている。（６層）

第８層　橙色土層…古墳時代の遺物を包含する。下層の上面と著しい不整合が見られることや，砂層のブロック，小石等を含むことから洪水等の影響による２次堆積層と考えられる。（７層）

第９層　褐色土層…古墳時代包含層，細礫を若干含む。上面は第８層と著しい不整合がみられる。（９層）

第10層　赤橙色粘質土層…弥生時代中期～後期の文化層

第11層　暗紫色固結火山灰層（暗紫コラ）…弥生時代中期頃の開聞岳起源噴出物，場所によっては，スコリアのみ点在している所，欠落している所もある。（10層）

第12層　明褐色土層…弥生時代中期以前の文化層（11層）

第13層　暗褐色小石混土層（11層）

第14層　赤褐色小石混シルト質土層…縄文時代後期～晩期の遺物包含層。小石を多量に含む。（11層）

第15層　赤褐色砂粒混シルト質土層…縄文時代後期～晩期の遺物包含層。（11層）

第16層　黒褐色～黒色パミス混シルト質土層…縄文時代後期～晩期の遺物包含層。第14層～第16層は，縄文時代晩期の土器を主体に包含している。（11層）

第17層　暗青灰色火山灰層…（黄コラ）縄文時代後期の開聞岳起源噴出物。（12層）

第18層　灰褐色砂質土層…縄文時代後期の遺物を主体に包含する層。（13層）

第19層　池田湖火山灰層…灰色～黄灰色を呈す。約 5,500年前の池田カルデラ形成期の噴火活動に伴い堆積したものと考えられる。この地方の地形の基盤をなしている。

（文責　渡部）

第３節　調査地点の層位について

グリッド東壁層位断面

第１層，第２層，第３層ａ・ｂ・ｃ，第４層～第７層の９層を確認した。第１層，第２層はいずれも近世～現代の土層である。遺物の出土はみられなかった。第３層ａ・ｂ・ｃは中世（鎌倉～室町時代）の土層である。溝状遺構を検出したが，遺構の性格等については不詳である。またこの溝状遺構から土師器片が１点出土している。第４層は砂層である。径５㎜前後の小石を若干含む。河川の氾濫等により堆積したものと考えられる。第５層は紫色固結火山灰層である。火山灰層中に砂礫層が挟まれている。またラミナとよばれる成層構造が観察される。層の最下部には貞観16年の最初の噴出物である火山礫層が２～５㎝程度の厚さで堆積している。

この紫色固結火山灰の降下の様子は『日本三代実録』に次のように記述されている。

「日本三代実録」(2)　記載内容

貞観
八年　四月　七日　授薩摩国従四位下開聞神加従四位上
一六年　三月　四日　大宰府言、去三月四日夜、雷霆発響、通宵震振動、遅明天気陰霧、昼暗如夜、于時雨沙、色如聚墨、終日不止、積地之厚、或処五寸、或処可一寸余、比及昏暮、沙変成雨、禾稼得之者皆致枯損、河水和沙、更為麁濁、魚鼈死者無数、人民有得食死或病（七月二九日条）

線引部分の「沙変雨成，河水和沙」の記述から火山灰降下時に雨が降り出したことや，旧河川に火山灰が堆積したことがうかがえる。

今回調査した地点の紫色固結火山灰層の堆積の状況や，上部に観察される砂層は，この記述を裏付けるものである(1)。

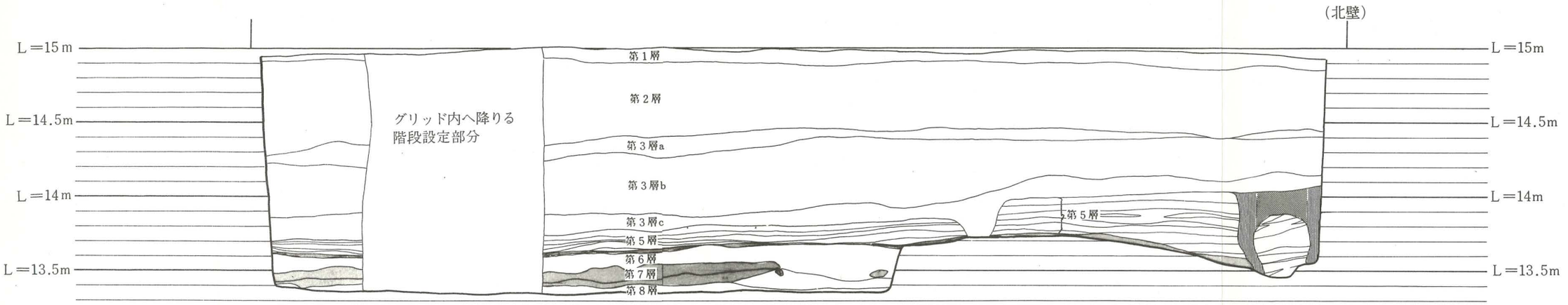
第６層は奈良～平安時代の文化層である。明黄褐色を呈し，20㎝～30㎝とその堆積は薄い。第６層からは８世紀末～９世紀代のものと思われる須恵器片が１点出土している。第７層は青色固結火山灰層である。火山灰層の間に，第６層土が観察される部分もあることから，少なくとも２回の噴火があったことがうかがえる。層の最下部には１㎝～２㎝の厚さでスコリア層が堆積している。

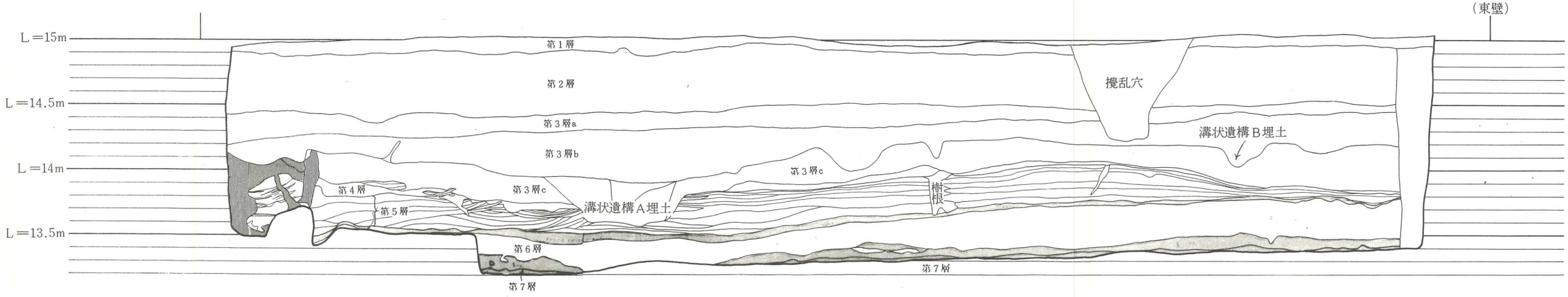
グリッド北壁層位断面

東壁と同じく第１層～第７層，加えて第８層上面までを確認した。第３層ｃから紫色固結火山灰層を掘り込んだ中世の遺構が検出されたが壁面のみの検出であったため，詳細については不詳である。また第６層から青色固結火山灰層を掘り込んだ遺構が検出されたが，これについても詳細は不詳である。青色固結火山灰層直下の第８層（橙色土層）の上部を確認した。古墳時代の遺物を多量に包含するが，第８層自体が洪水等による２次堆積土と考えられるため，遺物も流れ込んだものであろう。グリッド北東隅に平安時代の埋没住居跡の一部を検出，壁面にその状況が観察されるがこれについては第４節で詳述する。

（文責　渡部）

(1)　これは成尾英仁氏，下山　覚氏の教示による。
(2)　成尾英仁氏作成，転用





第13図　グ　リ　ッ　ド　東，　北　壁　層　位　断　面　図

第4節　遺構・遺物について

1.　遺構について

(1)　平安時代の遺構

平安時代相当と考えられる遺構は，本地点においては，文献上記録のある開聞岳の噴火によって埋没，倒壊した建物跡が検出された。この建物跡は，貞観16年の火山噴出物によって建物下半部分が埋められたものである。検出状況を説明し，建物の構造，及び埋没過程について言及する。

第15図1は，紫コラの検出状況である。紫コラは通常極めて硬く固結し，不明瞭なフォール・ユニットを形成する。図中スクリントーン部分は，ノーマルな紫コラの堆積状況が確認された部分である。一方，白ヌキされている部分は紫コラの微粒子のみが検出された部分で，細かなラミナを形成することから水の作用によって，噴出物の微粒子が再堆積したことが伺える。このことから，開聞岳噴出物の降下の際に白ヌキ部分に，何らかの要因によって，噴出物の堆積を防げる建物等存在を仮定することができた。その後紫コラを除去し，旧地形を確認した。――――①

第15図2のスクリントーン部は，人為的に掘られた溝である。――――②

第15図3のスクリントーン部は，腐植土が検出された部分である。この時点で壁面を観察すると，この腐植土を境に，先の紫コラの微粒子によって形成された二次堆積層が見られることから，時間的に，腐植土部分に，元来壁のような構造体が存し，紫コラの降下の際に，その侵入を防いだものと解される。さらに，構造体内部には，紫コラの微粒子が再堆積していることから，構造体内部に泥水が侵入したものと思われる。また，人為的に掘られた溝は，構造体の壁と思われる部分の外側に平行して掘られていることから，腐植土部分と，溝は一体の構造体であると判断できる。紫コラと構造体の内部との境を成す腐植土は平面図スクリントーン部のように交叉する。――――③

第15図4のスクリントーン部分は，盛土が行われ，小山状を呈する部分である。頂上部は窪む。――――④

第15図5のスクリントーン部分は，人為的な掘削が行われている部分で，他の現地表に比べ落ち込んでいる部分である。――――⑤

これら遺構の切り合い関係を整理すると，構造体の地山を掘削によって下げ，その排土を小山状に積み上げ，その後，溝を掘削している。更に，構造体の壁が置かれ，火山噴出物の降下が発生している。

第15図6のスクリントーン部は，直径20～30㎝程度に掘りくぼめられている。――――⑥

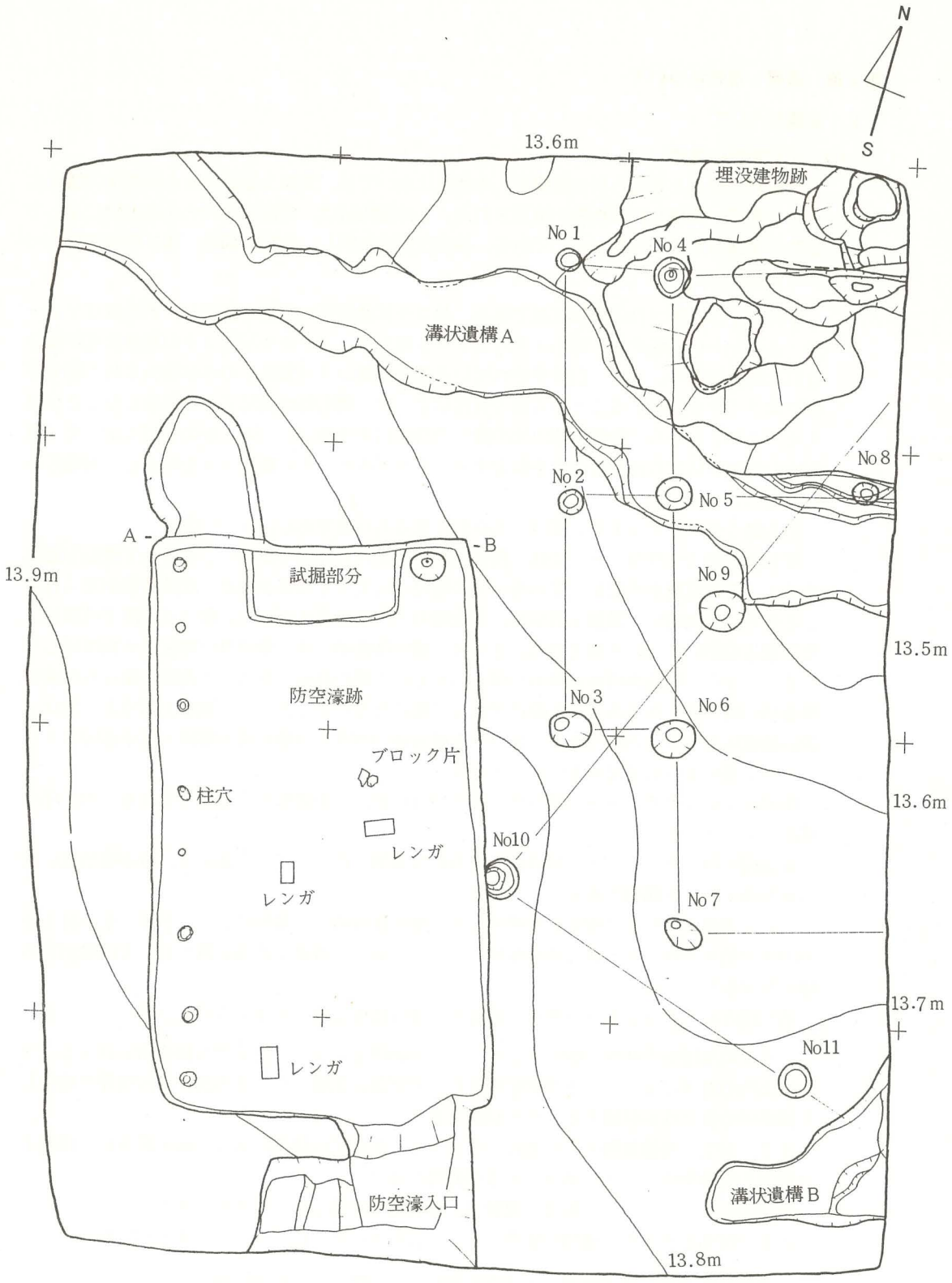
以上の遺構検出状況を総合すると，①～⑥の理由により，人工的な構築物が存在し，火山噴出物の降下によって，下半部が埋没し，上半部は倒壊した。その後，噴出物等で埋没した構築物の構造体が腐植土化したと判断できる。

さて，人工的な構築物として考えられるのは，平地式の建物があり，検出部分は，腐植土の状況から建物のコーナー部分である可能性が高い。

第16図のスクリントーン部は，建物の上部構造の配置を示したものである。

以上の情報をまとめ，建物の構造について言及すれば，以下のようにまとめられる。

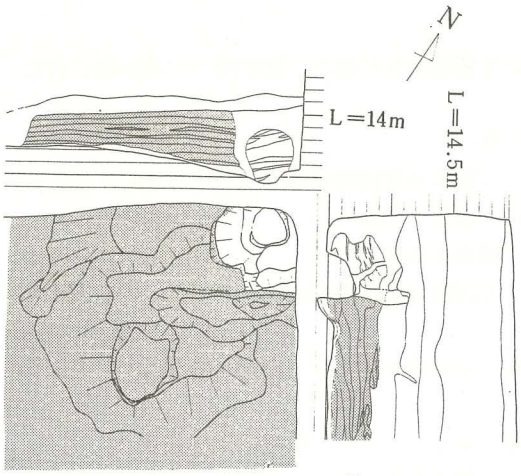
①　建物は地表面をやや掘削して床面を造り，その排土は，付近に置いた。



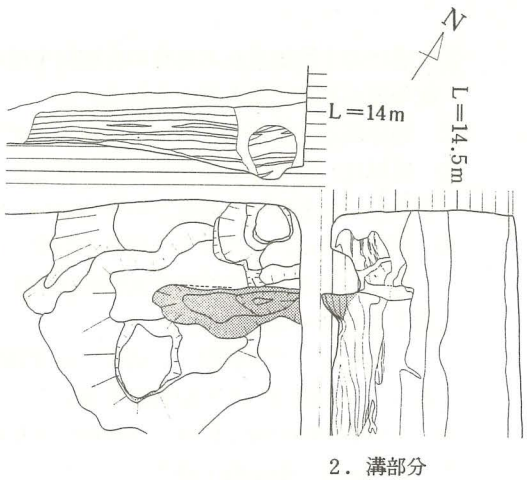
※等高線は第6層上面(紫色固結火山灰層直下)の検出状況

0 2m

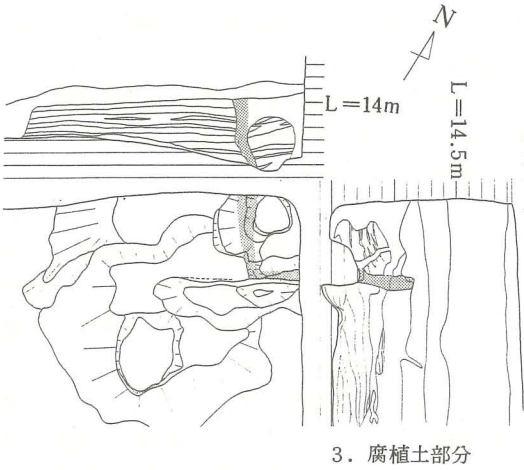
第14図 遺 構 配 置 図



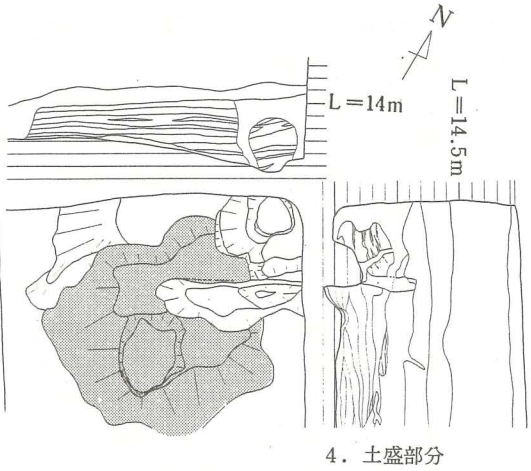
1．紫コラ分布状況



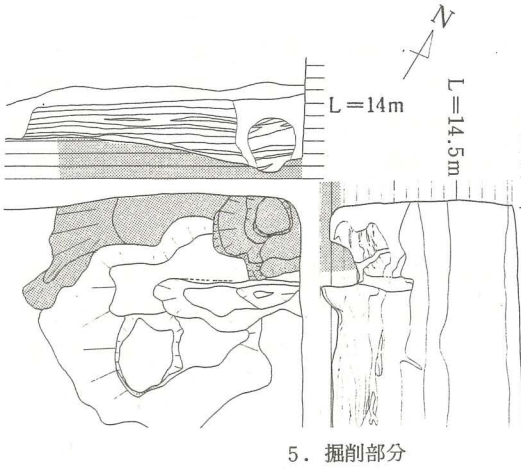
2．溝部分



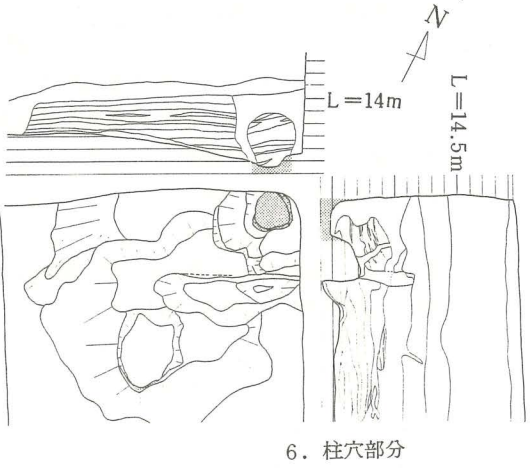
3．腐植土部分



4．土盛部分



5．掘削部分



6．柱穴部分

第15図　埋没建物遺構解説図

② 建物の上部構造が木材等の有機材を用いて構築された後に，壁に沿って溝が掘られた。雨水侵入を防ぐ為と考えられる。
③ 柱位置は，壁部分よりやや内側に存在した。
④ 壁材は，やや厚みのあるものであった。（紫コラ堆積時の横方向の圧力に耐え得るものであり，なおかつ，腐植土の厚さから，約７㎝以下のもの）
⑤ 壁材や柱は，カスガイや釘などを用いず構築されたこと。

残念ながら，この建物の大部分は隣接する国指定史跡地内に続いており，その実体を判明するに至らなかった。

ところで，この建物が，貞観16年(西暦874年旧暦３月４日）の開聞岳の噴火によって，どのように埋没したのか過程を復元したい。

① 火山噴出物の降下段階では建物は屋根等が存在し，また，壁等が存在していた。
② 最初の火山噴出物で降下したものは，火山礫である。この火山礫は，建物を破壊することなく，屋根等を滑り落ちたものと考えられる。第15図１の白ヌキ部分には，火山礫が見られなかった。
③ 水分を含んだ火山灰が降下し，建物の外部一面と厚さ30～40㎝の厚さで堆積した。この段階でも，壁部分は存在し，火山灰の侵入を防いだ。
④ 建物内部に泥水が侵入し，再堆積した。その結果，壁材部分は建物外からは火山灰に，建物内からは火山灰の二次堆積によって押さえられ，原位置に埋没した。
⑤ 床から60㎝以上の上部構造が倒壊，または腐植して失われた。
⑥ 埋没した建材が腐植土化した。

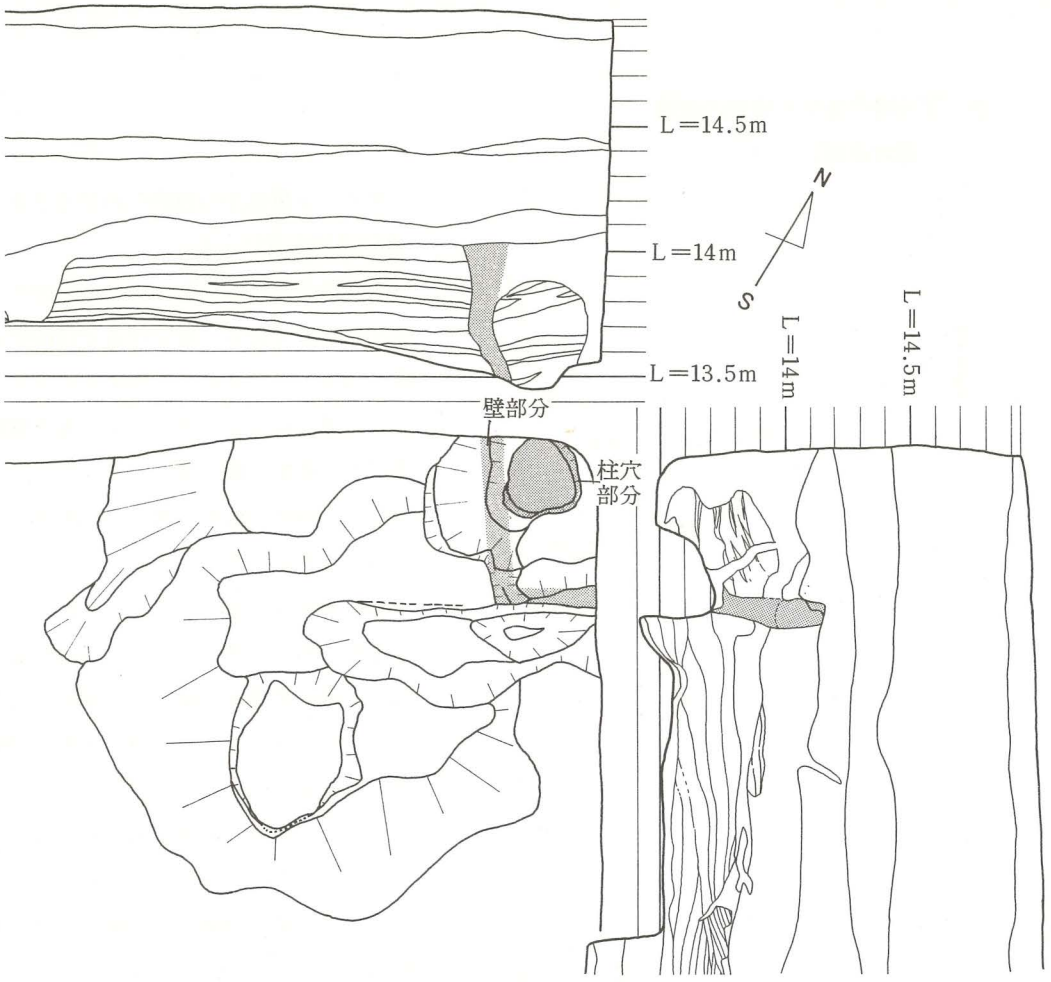
昭和63年に都市計画事業に伴う道路部分の発掘調査において検出された貞観16年の火山災害によって倒壊した建物跡同様，貞観16年旧暦３月４日まで，屋根が存在してした建物であり，今回の調査によって，２例目となった。このような火山災害によって倒壊した建物は，情報性において，次のようなメリット，デメリットがある。

メリットとしては，①噴出物が細粒のために，建材等の原体を推定しやすい。②火山災害の記録が残り，日付まで判断しうる。③噴出物がフォール•ユニットを形成し，災害の過程が理解できる。④噴出物が降下という状況であったため，遺構の破壊，遺物の移動の程度が低い。⑤火山災害を直接受けた建物等を遺跡内で比較することにより，共時における空間利用状況を把握しやすい，等。

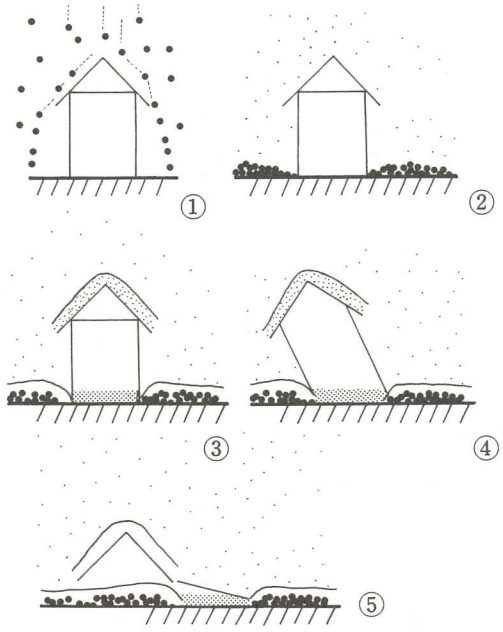
デメリットとしては，①高温の火砕流等のように、建材が炭化して現存するものがない。②噴出物が30～40㎝と火砕流堆積物等に比らべ薄いため，建物等の上部構造全てを理解することができない。③災害の発生が時間的に火砕流等に比らべ長いため，災害発生の時間を考慮すると，ある瞬間のデータとして，遺物の遺構内の配置状況について一律の解釈を加えられないこと，等。

以上のような点を踏まえたい。

第17図は，昭和63年に都市計画事業に伴う道路部分の発掘調査において検出された建物跡の倒壊過程である。倒壊の過程で若干今回の建物の倒壊過程と異なるものの参考として挙げた。国指定史跡に続くこのような建物の存在は，希少な火山災害遺跡としての価値を国指定史跡にも付加したものと考える。　　（文責　下山）



第16図　埋　没　建　物　跡　検　出　状　況　図



① 火山礫降下

② 水分を含む火山灰降下

③ 屋根に火山灰付着
家屋内に泥水浸入

④ 家屋倒壊

⑤ 家屋埋没

第17図　埋　没　建　物　遺　構　倒　壊　過　程　模　式　図

(2) 平安時代末から中世の遺構

——溝状遺構について——

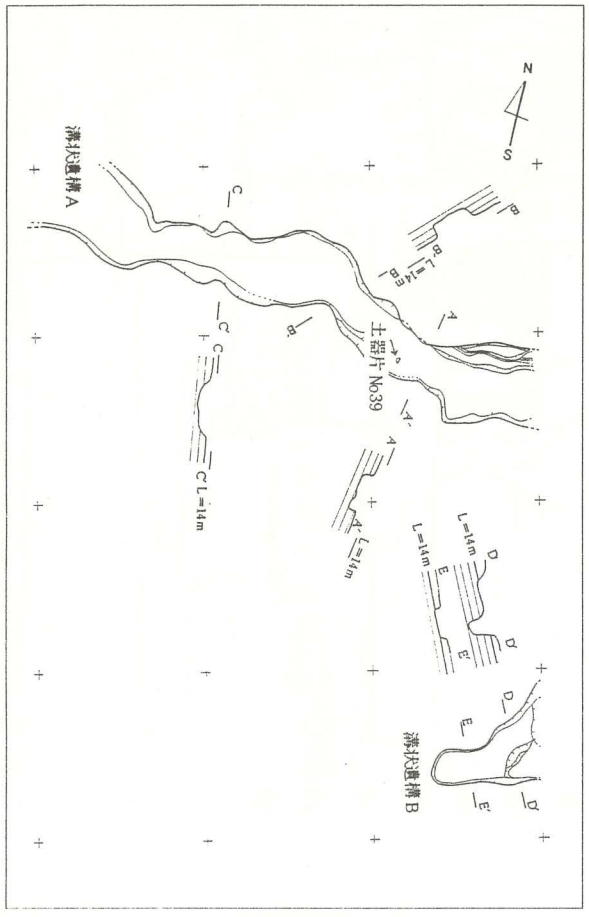


図18図　溝状遺構検出状況図

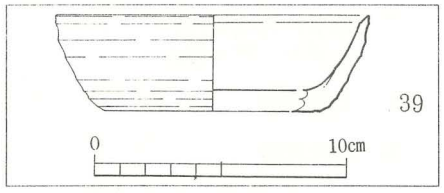


図19図　奈良・平安時代の遺物(1)

グリッド東壁から西側へのびる2条の溝状遺構を検出した。

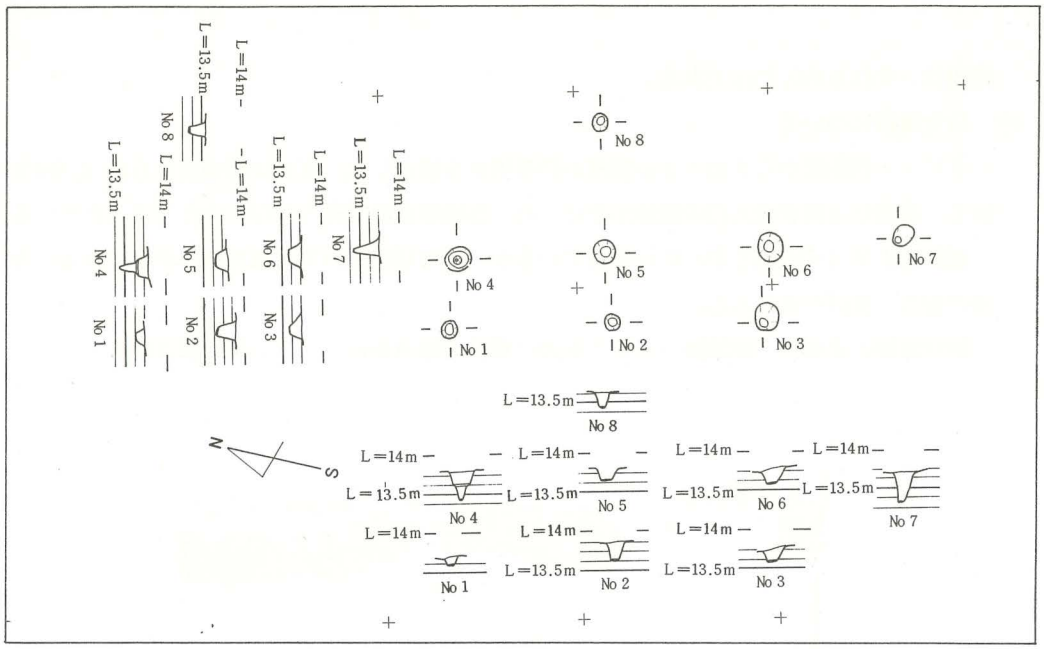
溝状遺構Aは幅約80cm～1m，深さ15～20cm程度である。東壁付近では段状の落ち込みがみられることやオーバーハングした部分があること，埋土（黒色腐植土）中に砂が多量に混在していたことなどから，自然の流水作用により形成されたものと考えられる。

溝状遺構Bは幅50～80cm，深さ10～40cm程度である。溝の一端がとじた形状を呈す。溝状遺構Aと同じく，段状の落ち込みがみられることや，埋土（黒色腐植土）中に砂が混在していたことなどから，これもまた自然の流水作用により形成されたものと考えられる。

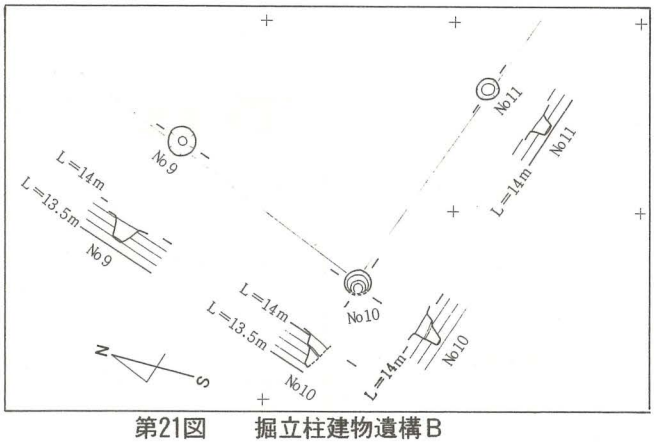
No.39は，溝状遺構Aから検出された土師器杯である。外面は回転ヘラケズリを施こし，内面はヨコナデが施されている。出土状況から層位的には西暦 874年以降の土師器であると考えられる。橋牟礼川遺跡からは，紫コラ直上の黒色腐植土中(1)より白磁・青磁等が検出されており，現在までの調査では紫コラ堆積後，災害復旧が行われず放置されていたものと考えられる。紫コラ堆積後，何年経たのち，橋牟礼川遺跡で生活が営まれるようになったのかという疑問について現在のところ，青磁・白磁の年代観より，鎌倉時代以降と考えられていた。しかしNo.39の土師器のようにヘラ切りのものが存在するとした場合，紫コラ直上の黒色腐植土層の上限は平安時代まで上る可能性もある。

（文責　下山・渡部）

(1) 調査地点層位では第3層a・b・cを指す。



第20図　掘　立　柱　建　物　遺　構　A



第21図　　掘立柱建物遺構B

―掘立柱建物遺構について―

紫コラ上面を検出した段階で，第３層より掘り込まれ形成された柱穴を確認した。埋土が黒色腐植土で紫コラを掘り込んでいることから中世の遺構と考えられる。

No.１～No.11まで11個の柱穴を検出したが，No.１～No.８，No.９～No.11の対応関係から，柱穴として認定しうると考えられる。また，それぞれの柱穴の対応から２棟の掘立柱建物遺構があったと考えられる。

掘立柱建物遺構A

No.１～No.８の柱穴により構成される。グリッド西側半分には第２次世界大戦時の防空壕が掘り込まれていたことや，調査面積が限られていたことから，建物の規模，構造等については不明である。

南北方向の柱穴間の距離（例えばNo.１からNo.２まで）は，ほぼ平均しており約1.75mを計る。また，東西方向の柱穴間の距離（例えばNo.１からNo.４まで）は，約75cmとせまい。

No.１，２，３の柱穴については，廂あるいは縁といった母屋に附属する施設を反映する可能性も予想される。

掘立柱建物遺構B

No.９～No.11の柱穴により構成される。掘立柱建物遺構Aと同様に建物の規模等については不明である。No.10の一部は防空壕が造られた際に壊されている。No.10からNo.９，No.11までの

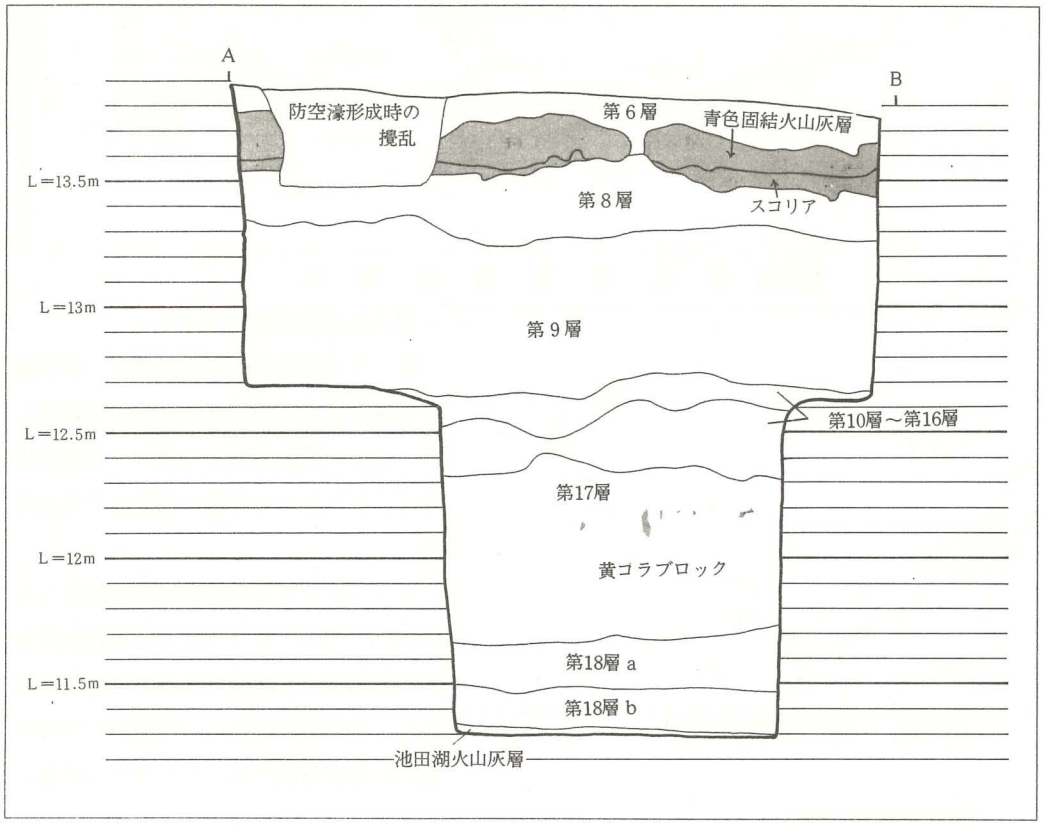
距離はいずれも約2.75mである。

(3) 防空壕跡について

グリッド西側部から５ｍ×２ｍ規模の防空壕跡を検出した。深さは現地表から約 2.5mを計る。南側には防空壕入口の階段が設けられ，爆風等が直接侵入しないよう工夫されている。

戦跡考古学は沖縄県を中心に行われているが，他地域においては報告例も希少である。今後の報告・検討がまたれる。

防空壕跡の北側に一部試掘トレンチを設け層位の確認を行った。（第22図参照）



第22図　試掘トレンチ北壁層位断面図

多量の遺物が出土した第８層が15～20㎝の厚さで堆積している。第９層は古墳時代包含層であるが，この地点から遺物の出土は見られなかった。

縄文時代後期に堆積した開聞岳起源火山灰（通称黄コラ）は場所によっては，20～30㎝の層をなして堆積しているが，調査地点においてはブロック状にわずかに点在する程度である。

第９層より下層については，欠落している層もあり，橋牟礼川遺跡の標準層位と若干の違いが認められる。第18層ｂを除去した段階で下層に池田湖火山灰層を確認，試掘を終了した。

（文責　渡部）

2. 包含層の遺物出土状況について

今回の確認調査で出土した遺物は，主に第6層と第8層に帰属されるもので，総数は，711点である。第8層は，5世紀後半～6世紀にかけてのある時期に発生した土石流または旧河川の氾濫によって形成された層であり，その中に包含されている土器はローリングを受けた細片が多い。

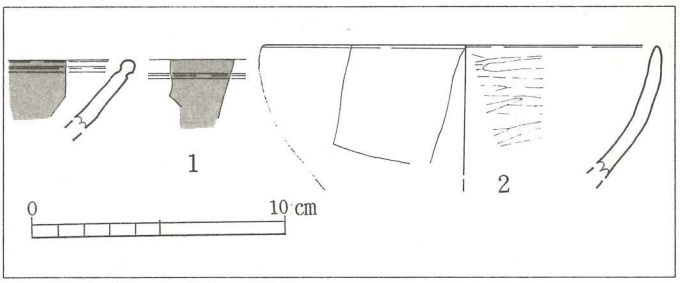
従って，第8層は6世紀以前の遺物を累積的に包含していると考えられる。

第6層は，6世紀後半～7世紀にかけてのある時期に発生した開聞岳を起源とする火山噴出物層（青コラ）と一連の火山灰層が腐植土化した層であり，8世紀から貞観16年（西暦874年）までの遺物を累積的に包含する。今回の調査では第6層中で原位置にあったと思われる遺物は皆無で，711点のうち，310点は第6層に包含されていた。遺物相互間における接合等の関連は，土器等の保存条件によるワレ以外には特に見られなかった。　　（文責　下山）

3. 遺物について

(1) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は，縄文時代晩期土器が2点出土した。



第23図　縄文時代晩期土器実測図(1/3)

No.1は，縄文時代晩期の精製浅鉢形土器の口縁部である。南部九州の縄文時代晩期編年(1)の黒川式土器の一器種を成すものである。

No.2は，No.1同様に，縄文時代晩期の黒川式土器の一器種を成すもので，ボウル状の器形を呈する。煮沸を目的とした，ボウル状の土器は，黒川式土器の段階で成立する一器種であり，一般に「組織痕土器」と呼ばれる一群の土器を含む。この土器は，土器表面の調整時に，外面を工具によるナデ調整やケズリなどの粗い調整を施こす一方，内面が極めて精良なミガキ手法を取ることから，半粗半精製土器と呼びうるものである。(2)

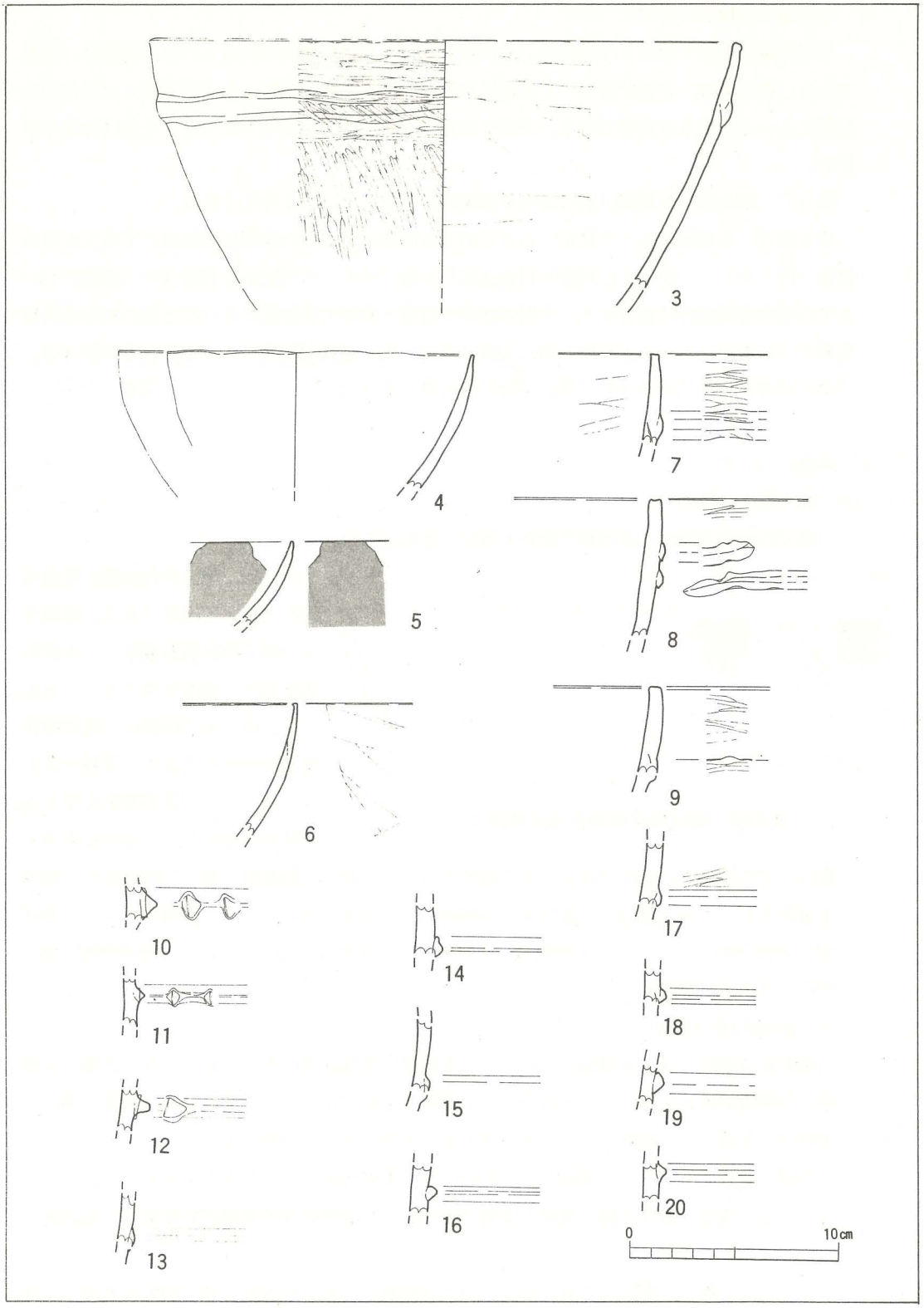
(2) 古墳時代の遺物

橋牟礼川遺跡では，古墳時代において，大規模な集落が複数考えられており，多量の古墳時代の遺物が出土している。その中で，土器が大半を占めており，それらは，南部九州の古墳時代の土器として総称される「成川式土器」と呼ばれるものである。

今回の調査で出土した古墳時代の土器のうち，実測可能であった34点を図化している。

(1) 河口貞徳『南九州縄文晩期土器型式編年』「上加世田遺跡発掘調査概要第5次調査」1952

(2) 下山　覚『「黒川式土器」細分の為の基礎論』「鹿大考古第3号」鹿児島大学法文学部考古学研究室　1985



第24図　古 墳 時 代 の 遺 物 (1)　（ 1 / 3 ）

No.３，No.７～No.20は，甕形土器口縁部及び突帯部である。No.３，No.７～No.９は，口縁部である。口唇部上面はいずれも平坦に横方向にナデられている。外面は，工具による研磨に近い丁寧な調整が施されている。一方内面は，幅のある先端が平坦な工具によってナデられている。外面の研磨に近い調整は，突帯が貼りつけられた後に施し，突帯部分も同様の調整が施されている。このような甕形土器の外側に研磨に近い調整を施す例は，「成川式土器」の中でも特殊であり，橋牟礼川遺跡を含むこの地域の特質であると解することができると思われる。突帯については，基本的に一条めぐるが，その貼付の粘土紐の始めと終わりは意図されてずらされていることが判る。No.８は，その典型と考えられる。

No.10～No.20は，甕形土器の突帯部である。No.10～No.12は，突帯部分は横方向にナデられており，突帯として突出するように意識されている。また，No.10～No.12はヘラ状工具によって刻まれており，「成川式土器」の甕形土器の中では，吹上町辻堂原遺跡(3)で検出された「67号住居址，70号住居址」出土の土器と対比しうるものである。一方，No.13～No.20の突帯部は，突帯のみであり，刻みは施されない。No.３と同様に，突帯部分にも研磨が施されるものである。

なお，No.10～No.12，No.14，No.15は，第６層出土であるが，ローリングを受けており，第６層形成時に混入したものと判断する。

No.４～No.６は，古墳時代の無文の鉢形土器の口縁部である。但し，No.５は，非常に粗い造りの高坏形土器の坏部の可能性がある。古墳時代の無文の鉢形土器は，吹上町辻堂原遺跡の「57号，58号，68号住居址」等に存在し，当該期の一形式を成すものであると考えられる。本遺跡の無文の鉢型土器は，「土器集中廃棄所（仮称）」(4)からも出土していることから，この遺構の検討により，更に詳しく形式として設定されるものと考えられる。

No.21～No.30は，古墳時代甕形土器または鉢形土器の底部と考えられるものである。このうち，No.21～No.23，No.25，No.26，No.29，No.30は，甕形土器の脚台部分である。No.26～No.29は，外面に研磨に近い調整が施されている。

No.24，No.27，No.28は，鉢形土器の底部と考えられるものである。古墳時代の橋牟礼川遺跡出土の鉢形土器の底部は，平底のものがある。しかし，No.28は，底部の立上りの状況から鉢形土器以外の機種の可能性もある。

No.31～No.33は，壺形土器である。No.31は，口縁部である。短い頸部はほぼ直立するものであるNo.32は，底部である。丸底と平底の中間の形態を成し，底部から胴部への立上りは稜線を有する。

No.33は壺形土器の突帯部である。通称「幅広突帯」と呼ばれるもので，文様が施される。突帯部には，「ハの字文」(5)及び「半裁竹管文」(6)を組み合わせて「Ｓ」字状の文様を施すものが認められる。

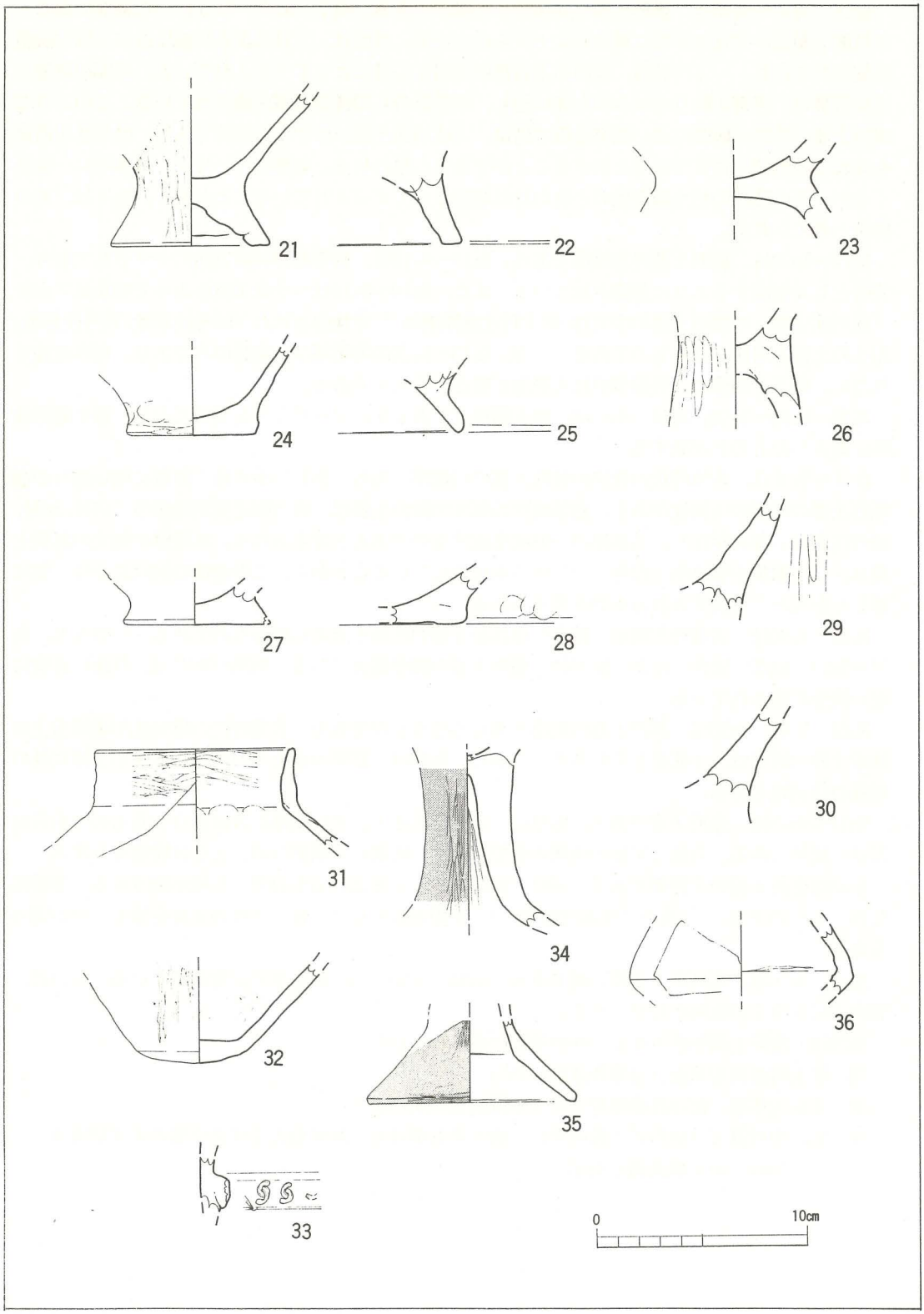
No.34，No.35は，高坏形土器脚台部である。No.34，No.35ともに赤色塗彩が施されている。No.34は，脚台内にシボリの痕跡が認められる。

No.36は，坩形土器胴部である。赤色塗彩は施されていない。

(3)　吹上町教育委員会「辻堂原遺跡」1977

(4)　平成元年度　都市計画事業に伴う発掘調査成果による。

(5)，(6)　中村直子『成川式土器再考』「鹿大考古第６号」鹿児島大学法文学部考古学研究室 1987，の文様表現を引用した。

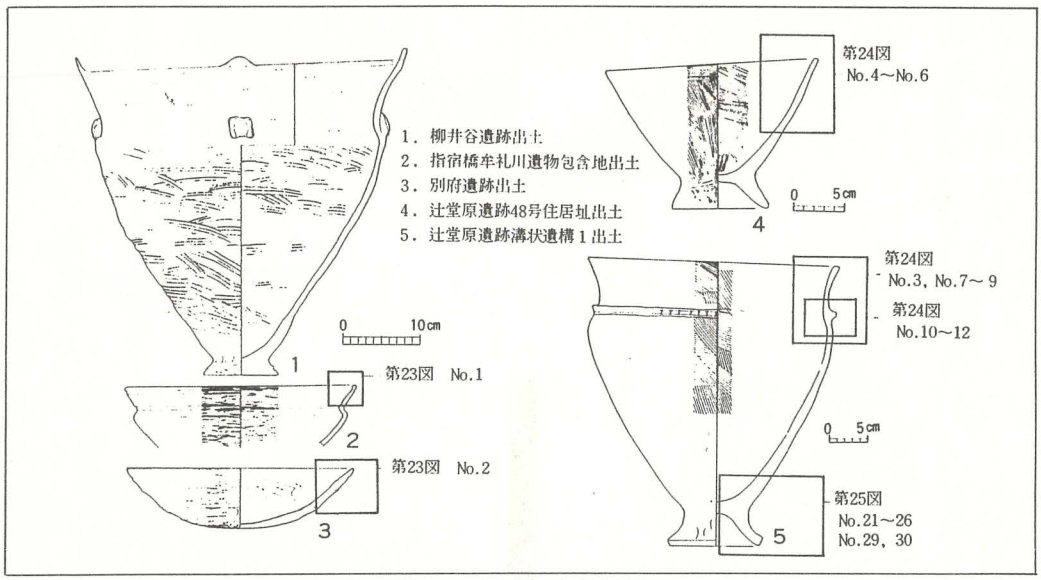


第25図　古 墳 時 代 の 遺 物 (2)　（ 1 / 3 ）

(3) 奈良・平安時代の遺物

No.37, No.38が該当すると考えられる。No.38は，須恵器で大甕の胴部下半部であると考えられる。外面は，平行タタキが施され，内面は，同心円タタキが施される。外面の平行タタキは，自然釉が厚くかかっているため著しい凹凸はない。No.38は紫コラ(7)直下から出土している。

No.37は，新城氏宅に隣接する国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地内から採集されたものである。外面は，平行タタキが施され，内面は同心円タタキが施される。外面頸部から口縁部は回転ヘラケズリのちナデを施す。内面の頸部付近は，タタキを施したのち，ヘラ状工具によってケズリが施されている。内面口縁部付近は，工具によるナデ調整を施したのち再度ナデられている。No.37は，採集品であるが，元来，紫コラ下の地層に包含されていた可能性がある。仮に型式学的な年代観を与えるとすれば，8世紀～9世紀の年代を与えたい。小田富士雄氏編年ではⅥ様式～Ⅶ様式の範囲内と思われる。(8)　　(文責　下山)



第26図　縄文時代晩期土器及び古墳時代土器の標本資料

(7) 紫コラとは，貞観16年(西暦874年)に発生した開聞岳の噴火に伴う噴出物の堆積層である。

(8) 小田富士雄『第3　豊前地方における須恵器』「天観寺山窯跡群」北九州市埋蔵文化財調査会　1977

〈実測図引用文献〉

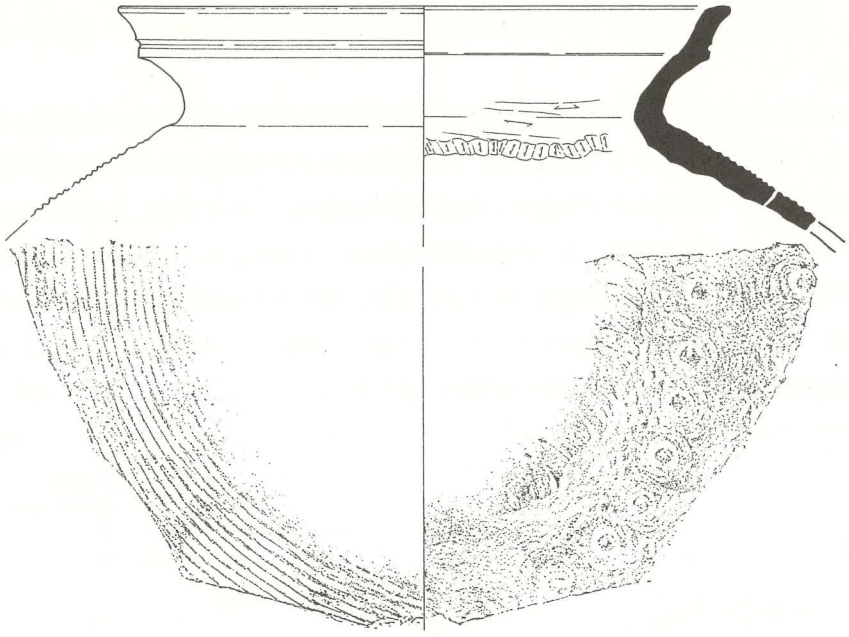
第26図1　下山　覚『「黒川式土器」の細分の為の基礎論』「鹿大考古第3号」鹿児島大学法文学部考古学研究室　1985

第26図2　同上

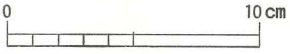
第26図3　同上

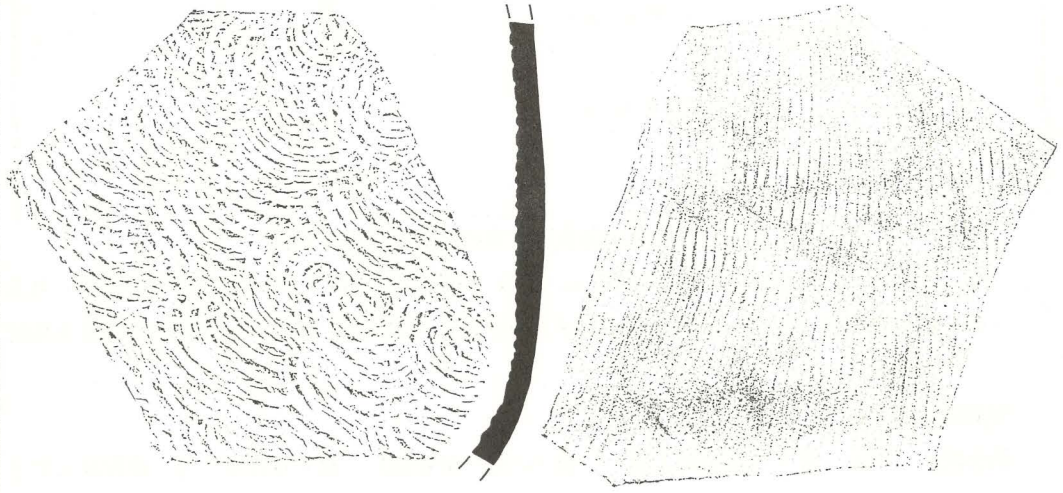
第26図4　吹上町教育委員会「辻堂原遺跡」1977

第26図5　同上



37





38

第27図　奈良・平安時代の遺物(2) (1/3)

第2表　遺　物　観　察　表

実測図No.	取上げNo.	出土層位	出土レベル（cm）	名　称	残存状況	色調 外	色調 内	色調 肉	色調 その他	胎土	調整	その他
1	501	8	1,329.9	縄文晩期浅鉢形土器	細片	7.5YR5/6	7.5YR5/6	7.5YR5/6	—	微砂粒を微量含む（鉱物名不詳）	(外)ケンマ (内)ケンマ	口縁部
2	3	6（P2内）		縄文晩期鉢形土器	破片	5Y5/1	5Y5/1	7.5Y5/1	—	細砂粒を含む。微砂粒を多く含む（セキエイ・ウンモ・白色鉱物）	(外)ヨコケンマ (内)ヨコケンマ	口縁部
3	671	8	1,338.5	古墳時代甕形土器	破片	2.5YR5/6	2.5YR5/6	10R5/6	—	微砂粒を含む。細砂粒を若干含む（セキエイ・カクセン石・チョウ石・白色粒）	(外)(内)(口)(突)工具によるケンマに近いナデ (外)「L→R」へ	No.672,675,676,679,681,682,683と接合。(突)は突帯接合後にケンマ。(外)にカーボン付着
4	692	8	1,339.8	高坏又は鉢形土器	破片	2.5YR7/4	10YR6/6～10YR8/2	10YR7/4	—	微砂粒を若干含む。細砂粒を若干含む（カクセン石・セキエイなど）	(外)L→R，工具によるケンマに近いナデ。(内)工具によるケンマに近いナデ。(口)ヨコナデ	口縁部，No.690と接合
5	680	8	1,340.3	高坏形土器口縁部	細片	10R3/6	10R3/6	2.5Y6/4	—	微砂粒を含む。細砂粒を若干含む（セキエイ・カクセン石・チョウ石など）	(外)ケンマ，(内)ケンマ，(口)ケンマ	口縁部，(外)(内)(口)は焼成後赤色塗彩
6	694	8	1,339.7	鉢形土器口縁部	破片	7.5YR5/6	5YR5/4	10R6/6	—	微砂粒を含む。細砂粒を若干含む。砂粒を微量含む（セキエイ・カクセン石・チョウ石・白色粒）・微砂粒・細砂粒を若干含む。砂粒を微量含む （セキエイ・カクセン石など）	(外)ナデ，(内)ナデ，(口)ナデ	口縁部
7	700	8	1,334.3	古墳時代甕形土器	破片	10YR7/4	10YR6/4	5YR7/4	—		(外)(内)(突)工具によるケンマに近いナデ	突帯部
8	165	6	1,333.8	甕形土器口縁部	破片	2.5YR4/1	2.5YR4/3～2.5Y7/1	5YR4/6	—	微砂粒を若干含む（カクセン石・セキエイなど）	(外)ナデのちケンマ，(内)ナデ，(口)ヨコナデ	(外)大量にカーボン付着，突帯部は1本の突帯が段違いに接合されている。
9	612	8	1,346.8	甕形土器	細片	2.5YR6/2～2.5YR5/1	2.5YR6/6	7.5YR7/6	—	微砂粒・細砂粒を若干含む。砂粒を微量含む（セキエイ・カクセン石など）	(外)(内)(突)(口)工具によるケンマに近いヨコナデ	口縁部～突帯部，突帯部は調整時に平坦化している。
10	48	6	1,353.0	古墳時代甕突帯部	細片	10YR7/6	10YR6/8	10YR5/2	—	細砂粒を含む（セキエイ・白色鉱物・カクセン石など）	(外)ヨコナデ，(内)マメツ	突帯部，突帯には棒状部に組織を巻き
11	117	6	1,341.7	甕形土器突帯部	極細片	5YR6/6	10YR7/4	7.5YR6/6	—	細砂粒を多く含む（カクセン石・セキエイなど）	(外)ナデ，(内)工具によるナデのちナデ，(突)ヨコナデ	突帯部は13㎜間隔で刻まれている。
12	619	8	1,341.3	土器	破片	5Y5/1～10YR6/3	10YR6/4	10GY4/1	—	微砂粒を若干含む。細砂粒を若干含む（セキエイなど）	(外)工具によるナデのちナデ，(内)ナデ	胴部
13	598	8	1,343.0	甕形土器突帯部	極細片	2.5YR6/2	7.5YR7/4	7.5YR7/4	—	微砂粒を若干含む。細砂粒・砂粒を微量含む（セキエイ・カクセン石・赤色鉱物）	(外)工具によるケンマに近いナデ，(突)ヨコナデ，(内)ナデ	突帯部
14	689	8	1,336.5	土器	極細片	7.5YR6/6	7.5YR6/6	10YR6/4	—	微砂粒を若干含む。細砂粒・砂粒を微量含む（セキエイ・チョウ石など）	(外)ナデ，(内)ナデ	胴部
15	21	6	1,383.4	甕形土器突帯部	細片	10YR7/6	10YR7/3	10YR7/3	—	細砂粒を多く含む。微砂粒を多く含む（カクセン石・チョウ石など）	(外)ケンマに近いナデ，(内)ナデ	胴部，(外)若干カーボン付着
16	405	8	1,340.9	甕形土器突帯部	細片	10YR7/4	10YR6/6～10YR5/1	5YR7/4	—	微砂粒を多く含む。細砂粒を含む（セキエイカクセン石）	(外)ヨコナデ，(内)ナデ	
17	609	8	1,352.8	甕形土器突帯部	細片	2.5YR7/2～N6/10	2.5YR6/3	10YR8/3	—	微砂粒を多く含む。砂粒を若干含む。礫を微量含む（セキエイ・カクセン石など）	(外)(内)(突)工具によるケンマに近いナデ	突帯部，(外)若干カーボン付着
18	709	8	1,330.5	古墳時代甕形土器突帯部	極細片	7.5YR5/6	5YR6/3	5YR5/6	—	微砂粒を多く含む。細砂粒を若干含む（セキエイ・カクセン石・白色粒など）	(外)ナデ，(内)ナデ，(突)ナデ	突帯部，(突)は無調整（ユビオサエ程度）
19	333	8	—	甕形土器突帯部	極細片	2.5YR6/2	10R5/4	10R5/4	—	微砂粒を若干含む。細砂粒を若干含む（セキエイ・チョウ石・カクセン石・白色粒）	(外)ナデ，(内)ナデ，(突)ヨコナデ	突帯部
20	308	6	1,325.7	甕形土器突帯部	極細片	2.5YR7/2	2.5YR7/3	10R6/6	—	細砂粒・砂粒を若干含む。小礫を微量含む（セキエイ・チョウ石・カクセン石・軽石粒）	(外)ヨコナデ，(口)(突)ヨコナデ，(内)ナデ	突帯部の頂部はヨコナデのため平坦に仕上げ

実測図No.	取上げNo.	出土層位	出土レベル（cm）	名称	残存状況	色調 外	色調 内	色調 肉	色調 その他	胎土	調整	その他
21	688	8	1,338.8	古墳時代甕形土器	破片	7.5YR6/6	10R4/2	10YR7/4	(底)2.5YR6/4	微砂粒を含む・細砂粒を若干含む。砂粒を微量含む（セキエイ・カクセン石・白色粒等）	(外) タテ方向にケンマに近いナデ，(内)工具によるケンマに近いナデ	脚台部，(底)，(脚内) はナデ
22	524	8	1,338.6	甕形土器脚台部（古墳時代）	細片	7.5YR ～ 7.5R4/6, 2.5GY5/1	5YR6/3	2.5Y8/3	—	微砂粒・細砂粒を若干含む。小礫を微量含む（カクセン石・セキエイ・チョウ石・白色粒など）	(外) タテ方向の工具によるナデ，(脚内) ナデ	(接地面) ヨコナデ
23	254	6	1,322.2	古墳時代甕形土器脚台部	破片	2.5Y7/1	7.5YR5/1	2.5YR6/6	(底) 10YR7/4	微砂粒・細砂粒を多量に含む。砂粒を若干含む。小礫を微量含む（セキエイ・カクセン石白色鉱物など）	(内) ナデ，(脚内) 剝落	脚台部
24	697	8	1,337.7	壺形土器(底部？)	破片	5YR6/4～ 7.5YR7/4	10R6/6	10YR7/4	(底)7.5YR6/6	微砂粒・細砂粒を多量に含む。砂粒・小礫を微量含む（セキエイ・カクセン石・小礫など）	(外) ナデ，(内) 工具によるケンマに近いナデ，(底)ナデ	平底を呈する底部
25	120	6	1,330.0	甕形土器脚台部	細片	7.5YR6/8	—	10YR3/1	(脚内) 7.5YR6/8	微砂粒を含む	(外) ナデ，(内) ハケメのちナデ(接地)ヨコナデ	脚台部
26	479	8	1,334.5	甕形土器	破片	2.5YR4/1～ 2.5YR7/3	—	2.5YR7/4	(底)7.5YR6/4	微砂粒を含む。細砂粒・砂粒を若干含む。小礫を微量含む（カクセン石・セキエイなど）	(外) ケンマに近いナデ (内) ナデ	脚台部，(内) カーボン付着
27	497	8	1,351.2	甕形土器底部	破片	10R6/4	10R5/2	10R6/8	(底) 10R6/3	微砂粒・細砂粒を含む。砂粒を微量含む（カクセン石・セキエイなど）	(外) ヨコナデ，(内) ナデ (底) ナデ	底部・平底
28	269	6	1,321.2	壺形土器？	破片	7.5YR6/4	10YR7/6	2.5Y7/4	(底外) 2.5Y5/1	微砂粒を含む。細砂粒・砂粒を若干含む。小礫を微量含む。(カクセン石・セキエイ・軽石粒)	(外) ヨコナデのちユビオサエ，(内) ケンマ，(底) 無調整	底部
29	385	8	1,335.4	甕形土器胴部	破片	7.5YR6/6	2.5YR7/2	7.5YR6/1	—	微砂粒・細砂粒・砂粒を若干含む（セキエイ カクセン石など）	(外) 工具によるナデのちナデ，(内)ナデ	脚台部に近い胴部
30	636	8	1,340.9	甕形土器脚台部	破片	5YR5/1	5Y4/1	2.5Y7/4	—	微砂粒・細砂粒・砂粒を若干含む（セキエイ 白色鉱物など）	(外) ハケメのちナデ (内) ナデ	胴部脚台部付近
31	676	8	1,338.5	古墳時代甕形土器	破片	—	—	—	—	—	—	No. 671,672,675,679,681,682,683, と同一個体
32	651	8	1,337.2	壺形土器底部	破片	10YR6/4 ～ 7.5YR7/1～ 7.5YR6/6	5YR6/4～ 10YR6/4	2.5YR7/4～ 2.5Y6/4	—	微砂粒・細砂粒を含む。砂粒を微量含む（セキエイ・カクセン石・チョウ石など）	(外) タテケンマ，(内) ケンマ (底) 無調整	底部（古墳時代？）705と接合
33	584	8	1,342.3	古墳時代壺形土器肩部，突帯部（幅広突帯部）	細片	10R6/4～ 2.5YR7/3	10R6/6	10YR7/4	—	微砂粒・細砂粒を若干含む。砂粒を微量含む（セキエイ・チョウ石・カクセン石など）	(外) ナデ，(内) 剝落 (突) ヨコナデ	肩部突帯部，突帯には半裁竹管文を組み合わせて「S」字状文を形成する。
34	440	8	1,329.4	古墳時代高坏形土器	破片	10YR6/6～ (7.5R4/8)	10YR7/6	10YR7/6	—	微砂粒を若干含む。細砂粒・小礫を微量含む（カクセン石・セキエイなど）	(外) ケンマ，(脚内) シボリ	脚台部，(外) は焼成後赤色塗彩
35	669	8	1,339.8	古墳時代高坏形土器脚部	破片	7.5R3/6	10YR5/3	2.5YR6/3～ 2.5YR7/4	—	微砂粒・細砂粒を含む。（セキエイ・カクセン石など）	(外) ケンマ，(内) 工具によるナデ，(底)ヨコナデ	脚部，(外) に焼成後赤色塗彩 No.667,670 と同一個体
36	36	6	1,345.5	古墳時代坩形土器	細片 (胴) 1/8	7.5R4/4	10YR4/2	7.5YR6/6	—	微砂粒・細砂粒を含む。（セキエイ・カクセン石など）	(外) ケンマ，(内) 工具によるナデ	胴部屈曲部 (外) 焼成前赤色塗彩
37	採集	国指定内	—	奈良～平安時代・須恵器甕形土器	破片（(口) 1/3残存）	10R4/3～ 5Y4/2	7.5YR5/3	7.5Y5/1	—	細砂粒を若干含む。	(内) 同心円タタキのちヘラケズリのちナデ，(外) 平行タタキのち回転ナデ	自然釉が若干かかる
38	71	6	1,369.2	須恵器大型甕形土器胴部	19cm × 18cm	7.5YR3/3～ 7.5Y4/2	5YR4/3	5Y4/1	—	細砂粒を若干含む。小礫を若干含む（セキエイ・白色鉱物など）	(外) 平行タタキ 3.7cm幅 (内) 同心円タタキ 直径 6.2cm	胴部肩部屈曲部付近 (外) 自然釉がかかる。 No.71,72,80,81 が接合
39	1	6	1,359.8	土師器坏	(口) 1/4	10YR7/3	10YR7/3	10YR7/3	(底) 10YR7/3	微砂粒を含む。砂粒を若干含む（赤色粒）	(外) 回転ヘラケズリのちナデ，(内) 回転ナデ，(底)ヘラ切り？のちナデ	口縁部～底部

第５章　考　　察

今回の発掘調査の成果としては次のものが挙げられる。

①縄文時代晩期の資料が追加されたこと。

②古墳時代の資料が追加されたこと。

③奈良～平安時代の資料が追加されたこと。

④平安時代，貞観16年（西暦 874年）旧暦３月４日の開聞岳噴火に伴う火山噴火によって発生した災害の被害を受けた建物が検出されたこと。

⑤平安時代の建物の構造の一部が明らかになったこと。

⑥国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地に続く平安時代の建物跡であることから，国指定史跡の価値として，新たに火山災害遺跡としての価値が付加されたこと。

⑦国指定史跡の南側にも，国指定史跡と同質の遺跡が広がることが確認されたこと。

⑧貞観16年の開聞岳噴火の発生後，再びこの遺跡で生活が営まれたのは，平安時代後期に上がる可能性が出て来たこと。（ヘラ切り土師器坏の検出による。）

⑨平安時代後期から15世紀の間のある時期に営まれた建物跡が二基検出されたこと。

⑩貞観16年の火山噴火噴出物堆積後に洪水等の災害が発生し，水流によって溝が形成されたこと。

⑪第２次世界大戦の時に造られた防空壕跡が検出され，橋牟礼川遺跡では初めての戦跡考古学の対象資料が発見されたこと。

以上のような成果のうち，特筆されるものは，④～⑦である。従来，国指定史跡の指定事由として，浜田耕作博士らによっておこなわれた大正７，８年の発掘調査によって証明された縄文土器と弥生土器の時間的弁別という学史的価値がある。これに加えて，浜田耕作博士が調査報告の中で述べられたとおり「先史時代のポムペイ」としての価値，つまり，火山災害遺跡としての価値が再認識されたのである。しかも，火山災害遺跡として認識されたものとしては，国内で最も早く，また，文献上に記録のある古代の火山災害遺跡は国内でも初例であり，その重要性は極めて高いものである。火山国日本の特質をよく理解できる遺跡として，今後の保存・活用を考えてゆく必要があると考えられる。

さて，橋牟礼川遺跡の当地点で提出された今後の問題点を列挙する。

①平安時代貞観16年の建物の全体像を把握すること。

②紫コラ（貞観16年の火山噴出物堆積層）堆積後，生活が再開される時期の把握。

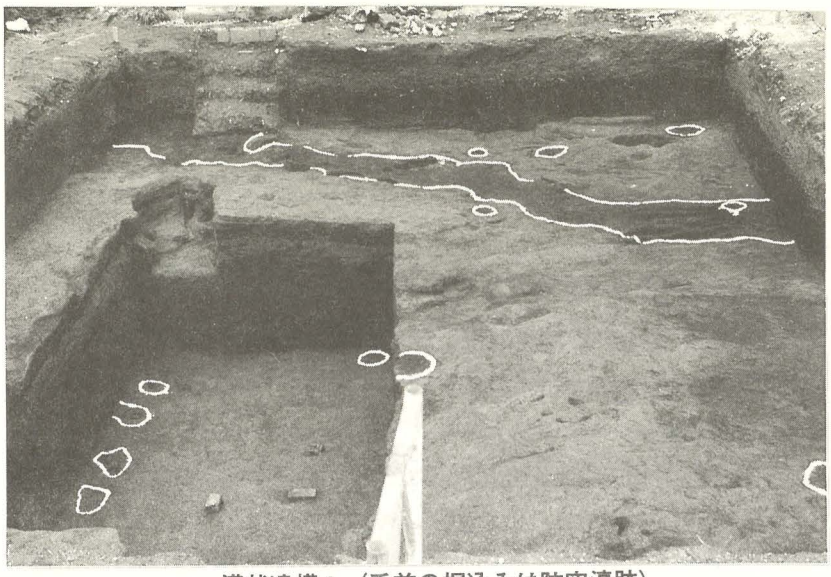
③国指定史跡南側の遺跡の広がりについて把握すること。

④遺跡全体の中での当地点での位置づけを明確にすること。

等々挙げられる。

平安時代の埋没建物については，新城勝朗氏の御理解と御協力によって，家屋位置を若干変更し，現在駐車場として掘削が及ばないよう御配慮頂いた。国指定史跡との境界に検出されたこの遺構の重要性から考えて，氏の御配慮に対し深い感謝の念を抱かずにはいられない。この場において明記し，永く氏の意を讃えたい。

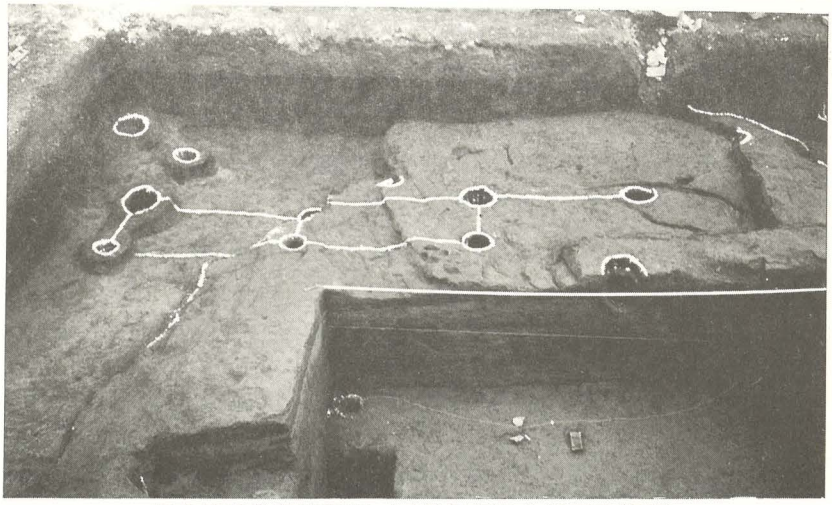
（文責　下山　覚）



溝状遺構A（手前の掘込みは防空濠跡）

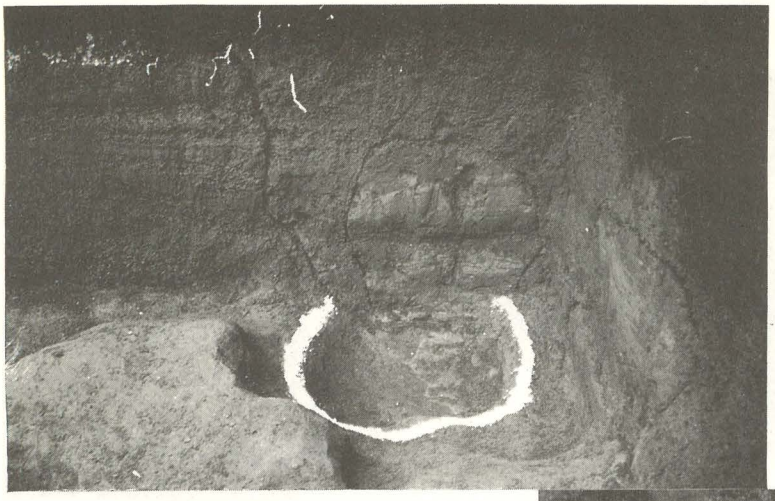
溝状遺構Aより出土した土師器坏

（拡大）



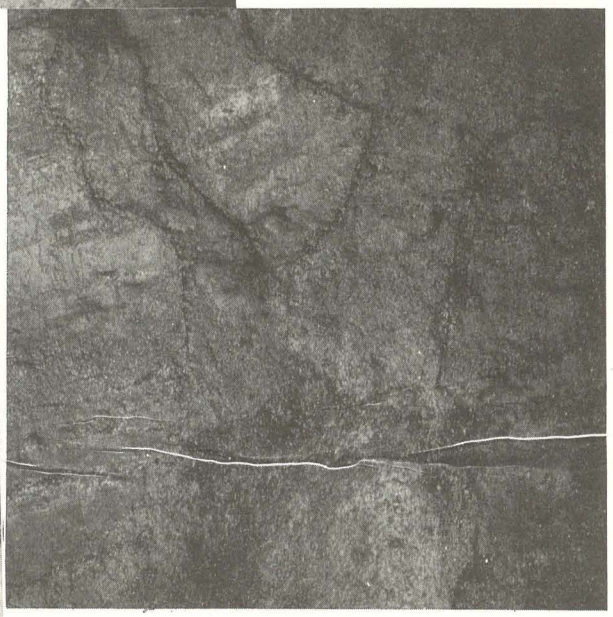
掘建柱建物検出状況（手前の掘込みは防空濠跡）

図版1　溝状遺構A，溝状遺構Aより出土した土師器
掘立柱建物遺構A



←建物のコーナー部分
（写真A）

腐植した壁材部分の断面→
（写真B）



建物のコーナー部分，手前の掘込みは
建物の溝部分　（写真C）
↓

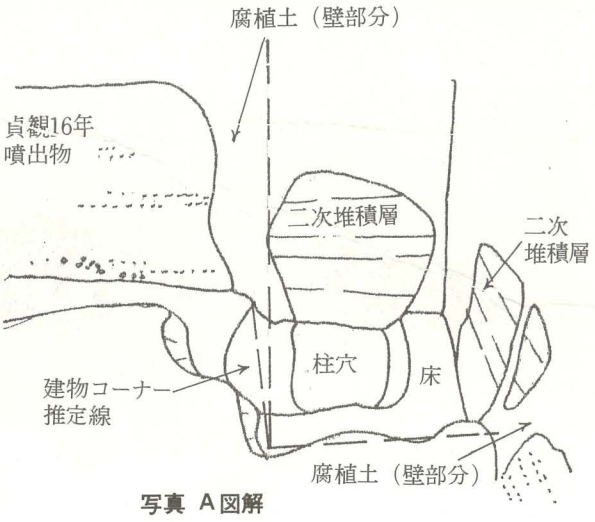
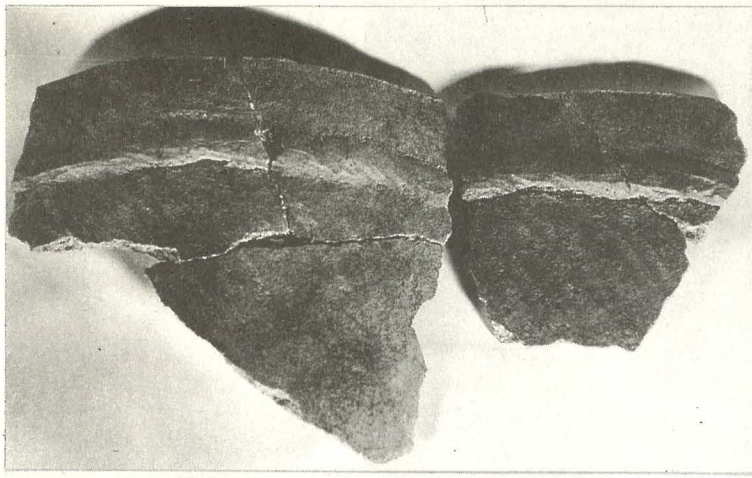
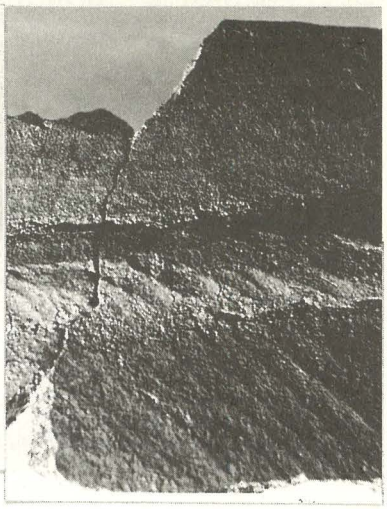


写真 A図解

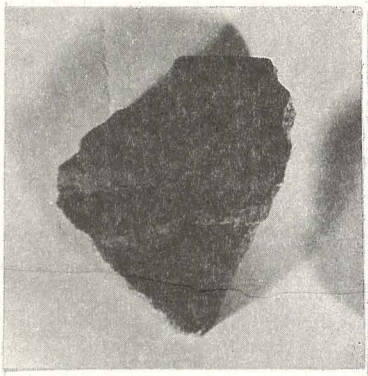
図版2　貞観16年の開聞岳噴火に伴う災害を受けた建物跡（一部）



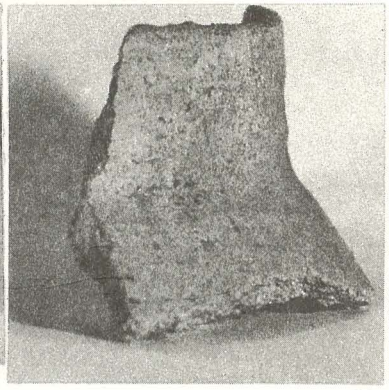
3



(拡大) 3

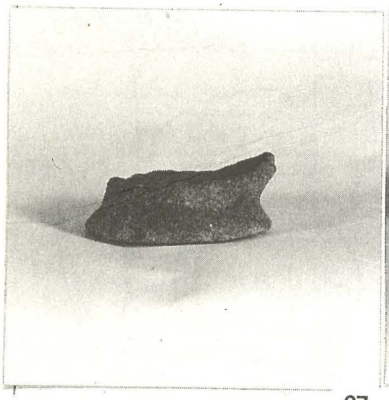


8

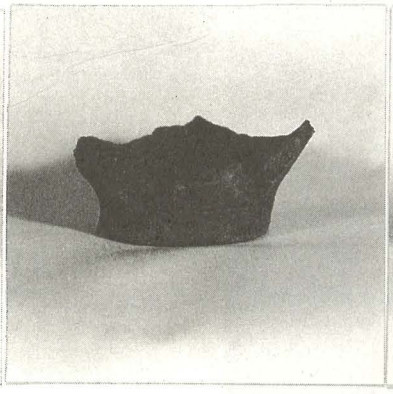


31

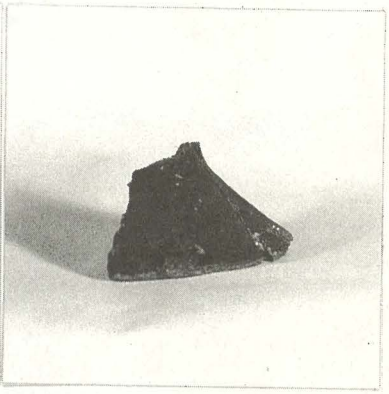
21



27

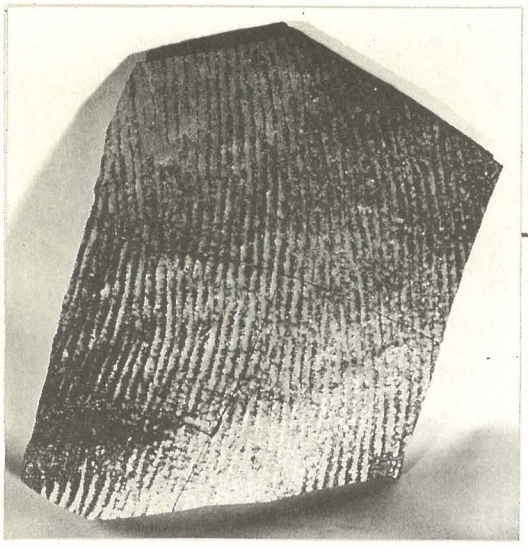


24

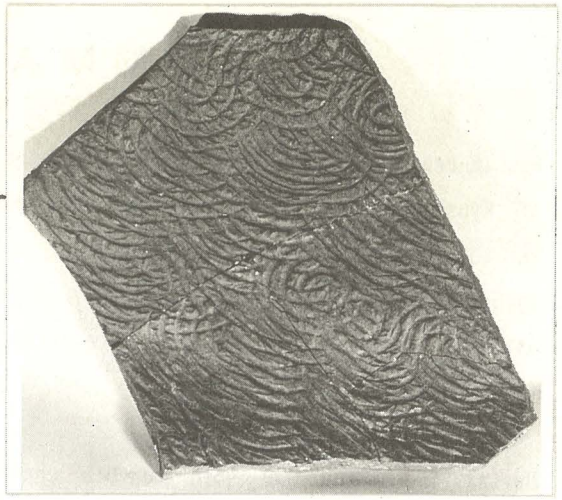


35

図版 3　古墳時代土器



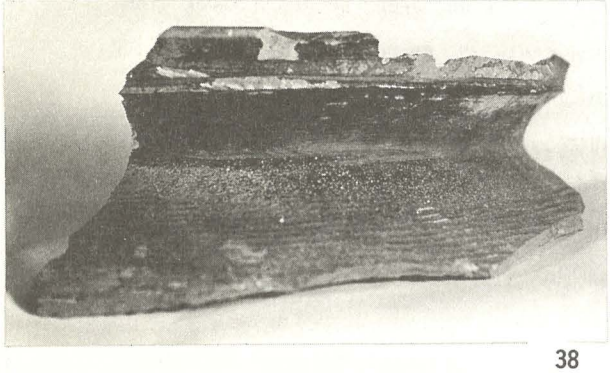
37（表）



（裏）37

（拡大）

（拡大）



38

（拡大）

38

（拡大）

図版４　奈良～平安時代須恵器

SUMMARY

Hashimuregawa archaeological site is located in Ibusuki-City near the southernmost tip of Kyushu Island in Japan. The site was first excavated in 1919 resulting in the discovery that the Jyomon style pottery is older than that of the Yayoi style. Owing to this discovery, 2.3ha of the site area designated a national histric site. Recent excavation has revealed that the site is geater than 10ha.

During the Kofun age (5th to 6th century) this area was the location of a large village that was periodically disrupted by volcanic activity from nealy Mt. Kaimon (only 10km to the southwest). Two Kofun and one Heian aged eruptive events are recognized at this site. The Heian aged eruption took place on March4, 874 and was subsequently recorded in an early 10th century document entitled Nihon Sandai Jitsuroku.

Having excavated a portion of this site we have gained a great deal of knowledge about the lives of the kofun and Heian aged people. Among the many intresting artifacts, the most-significant is a portion of a dwelling that was crushed by weight of the ash from the March 4, 874 eruption.
The documentain of this type of volcanic disaster is very unique and is the oldest written testament of its kind in Japan. This archaeological site characterizes the volcanic nature of the Japanese Islands and shows how the lives of the people have been affected by it.

Original: Tetsuya Watanabe.
Proofreading: Lance Rovert.

<Key words >
Hashimuregawa archaeological site
volcanic activity
Mt. Kaimon
Nihon Sandai Jitsuroku
volcanic disaster

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

橋牟礼川遺跡

発行　指宿市教育委員会
鹿児島県指宿市十町2424
印刷　今村印刷所